

---

# ヒロインの資格

彩月空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒロインの資格

### 【Nコード】

N9687E

### 【作者名】

彩月空

### 【あらすじ】

人はそれぞれ異なる物語を持っている。彼の物語の中ではヒロインだけれど、また別の彼の物語の中では少女Aにすぎないときもある。あなたの物語のヒロイン役には、別の人の名前が記されていないだろうか……。

## 零章

私は、彼の物語の中ではヒロインだけれど、

彼の物語の中では少女Aにすぎない。

あなたの物語の中で、私はどんな役を与えられているのだろうか。

君にとって、私はただのエキストラになってはいないだろうか。

ヒロイン役に、別の人の名前が記されていないだろうか。

いつから、と聞かれるとはっきりと答えられる自信はない。

けれど、私は彼に恋をした。

今はまだ、私は彼にとって「他人」に過ぎない。

これからも、どうなるかは分からない。

でも、私は望んでいる。

いつか、彼の「ヒロイン」となれる日が来ることを。

彼の物語の中で、「ヒロイン」のところに私の名前が刻まれる日が来ることを……。

## プロローグ はじまりの日

高校一年生の春。新しい制服に、新しい学校。全てが新しい生活の始まりに、はやる気持ちを抑えながら入学式を迎えた私は、クラス発表を見て、間抜けにもぽかんと口を開けてしまった。彼はもう覚えていないかもしれないけれど、私が中学生のときに出会い恋に落ちた人の名前が、そこにあった。

しかも、同じクラスに……。

私の記憶が確かならば……絶対に確かなのだけれど、彼の家はここからかなり遠いはずだ。だから、飛び上がりたくなくなるくらい嬉しい気持ちを制して、きつと同姓同名の別人だろうと無理やり言い聞かせながら教室に入った。しかし、そこで見つけた彼の姿は間違うことなき、あの彼であった。引越したのか、それとも一人暮らしでも始めたのか……。それを聞く勇氣はまだなかったけれど、彼がここにいることだけは確かで、私はこの幸せをかみ締めた。

ただ、彼の瞳はあの頃のように輝いてはいなかった。

彼の顔はあの頃のように笑えていなかった。

そこが少し気にかかったけれど、それでも久しぶりに会えたという嬉しさが勝り、そんな気持ちもすぐに消えていった。

彼は、癖なのか時折空を見上げる。その横顔は高校生とは思えないほど大人っぽくて憂いを帯びていたのがやたらに胸に残った。

出席番号順に座った教室の中、窓側の前から2番目の席。そこに彼はいた。

雪村修一。

女子からもうやまれるだろうさらさらで綺麗な黒髪と、そのすらりとした体型から中性的な印象を受けるかもしれない。私の記憶によると、彼は少し子どもっぽい部分もあるけれど、声も態度も落ち着いていて同年代の男子に比べてかなり年上に見える人だったはずだ。

「こんにちは」

突然、声をかけられて私は慌てて雪村君から目をそらした。声をかけてきたのは私の後ろの席の女の子。振り返って私は絶句した。そこにいたのはとても綺麗な人だったのだ。目つきは少しきつそうだけれど、ふわりと微笑むその顔に私は好意を覚えた。透き通るように白い肌、軽くウェーブのかかった茶色の髪。スカートから伸びる足は長く、どこかで雑誌のモデルをやっていると言われたら、すぐさま信じてしまうだろう。

そして瞬間的に、神様は不平等だと思った。

「えーっと、笠原なのかさん、よね？ さっきクラス発表の掲示で見えてきたわ」

「あ、はい。えっと……」

彼女には申し訳なかったが、私は彼女の名前など知らない。そもそも、入学したての最初のクラス発表の掲示で、同じ中学の人ならともかく、全く知らない他の人の名前にまで注意がいく人がいったい何人くらいいるだろう。

そう思っても、私はちゃっかり雪村君の名前をチェックしてしまっただけけど……。

「あたしは吉川葵。葵でいいわ」

吉川葵。初対面にしては少し慣れなれしい人だなと思ったけれど、それでも私は別に嫌ではなかった。友人が増えるのは嬉しい。

「あ、よろしく願います。葵……さん」

「さん”もいらないわ。それから敬語もやめてよね」

葵はその大人びた印象とは対照的に、ころころと愛らしく笑う。

この人は、私なんかとは違ってとてももてるんだらうと思った。  
私は身長も低く、それゆえ胸もあるとは言えない（無いわけではない）。顔もそこまで可愛いとは思っていない。唯一のとりえだと信じているのは、この髪だけだ。

あの日、彼が言っているのをこっそりと聞いた。黒く、そして長い髪。彼が好きな長い髪。

「さつきから何をぼーっと見ていたの？」

私が髪を触りながら、そんな感慨にふけっているとき、葵が声をかけてきた。初対面の人に言うべきかわざらざるべきか迷ったけれど、私は頬を赤らめつつ口を開いた。

「あの、窓際に座っている人……」

私は目で雪村君を指す。

「……あの人がどうかしたの？」

「私の、好きな人なの」

恥ずかしさのあまり、下を向いていた私には気づかなかった。

葵が苦々しい表情で、雪村君をにらみつけていたことを。

## 一章 雪村修一（1）

驚いたことに、雪村君は一人暮らしをしているらしい。らしい、  
というのはあくまで噂であって、本人から直接聞いたわけではない  
ということだ。

でも、部活にも入らず放課後の予定はほとんどバイトで埋めてお  
り、お昼のお弁当は自分で作っている、というのは彼の口から直接  
聞いた。

私は少しずつ、彼に近づけていっていると思っていた。何とか会  
話の糸口を見つけては彼に近づき、毎日毎日一言二言話をする。彼  
は小さく微笑みながらそれに答えてくれる。やっぱり私のことは覚  
えていないみたいだったけど、それでも私は良かった。

これから仲良くなっていけばいいから……。

一ヶ月が経つころには、私はクラスのほとんどの人と「友だち」  
になっていたと思う。男女問わず、仲良くやっていくのはとても楽  
しい。でも、雪村君と、それから葵は少し違うみたいだった。

誰かをつるむのを嫌がっているみたいに、雪村君は基本的に一人  
で座っている。誰かが話しかけると優しく応えるが、それでも彼と  
の間には見えない壁があるようだった。来るもの拒まず、去るもの  
追わず。まさにそんな風だった。そして、それは葵も同じだった。  
もちろん、2人とともに周りに敵を作るようにしているわけでない。表  
面上はとても人当たりの良い人だ。

でも、なんとなく、本当になんとなくだけどそれは「演じている」  
ように思えた。私のように、たくさんの友人を作ることが大事だと  
は思っていないみたいだ。



「雪村君って、一人暮らししてるのかな？」

「ん？」

お昼休み、雪村君はいつも教室にはいない。聞いたところによると彼はよく屋上で空を見上げているらしい。まるで、そこに誰かがいるかのように、じっと見つめているらしい。不思議な人だ、と思う。

「興味ないから、分からないわ」

葵は素っ気なくそう言うと、苦笑を浮かべた。

「なのかは、あいつのどこがいいわけ？」

そう言われて言葉につまった。果たして、中学のときの話をするべきかどうかを迷ったのだ。あんな些細なことだけで、今でも彼が好きだなんて笑われてしまうかもしれないと思って怖かったのだ。

「あいつ、何考えてるか分かんないじゃん」

はき捨てるように言った葵は、どこか悲しそうな瞳をしていた。

「でも、優しいよ」

「どうせ上辺だけでしょ」

「あ、頭も良いし」

「頭が良いだけなら、隣のクラスの桜井だってかなりできるらしいじゃん」

「え、えっと……」

「好きな人っていうのは」

さすような視線が私の瞳を貫いた。私はどきりとして口ごもる。

葵の瞳は真剣そのものだった。

「入学式の日にそう言ったのはどういうこと？ あいつと前にどこかで会ったことがあるの？」

「それは……」

会ったこともあるし、言葉を交わしたこともある。でも彼は覚えていないかもしれないくらいに些細なことなのだ。

「……まあいいわ」

「へ？」

「雪村は一人暮らしのはずよ」

「そうなの！？ え、家族は？」

「詳しくは知らないけど、家族はいるはずだから、家を出たんじゃないかしら」

「こ、高校生で？」

「だから、詳しくは知らないわ」

「そう、なんだ……」

葵の言葉を信じるならば、雪村君は一人暮らしをしている。理由は分からない。家族がいるということは、引越したわけではなく、彼だけ出てきたということの間違いない。

では、なぜ？

がらがらと教室のドアが開き、誰かが中を覗きこんだ。教室内をぐるりと見渡し、ため息をついたのは、英語教師で陸上部顧問の林先生だった。まだ二十代の林先生は、なんでも現役時代は100m走でインターハイ四位入賞を果たしたということで、生徒たちの間ではちよつとした有名人になっている。目的の人物がいなかったのか、林先生は残念そうに首を横に振ると教室を後にした。

「なんだろうね？」

「……………さあ、ね」

葵はつまらなさそうに言っつて横を向いた。

その様子を見て、彼女は私に何かを隠しているのではないか、と思った。それが雪村君のことなのか、それとも林先生のことなのか。それは分からないけれど、彼女は多分、私の知らないことを知っている。

……………でも、それを聞くことはできない。

それを聞いて、葵との友人関係が終わってしまうかもしれないから。せつかく築き上げた関係を壊すのは怖い。

失うのは、怖い。

午後の授業ぎりぎりに、雪村君は教室に戻ってきた。寝不足なのか、眼を真っ赤にした彼は、机にうつぶせるとそのまま寝息を立てる。先生に注意されるまで、彼は眠り続けた。たたき起こされてクラスに笑いを生む彼を見て、後ろの席から小さく舌打ちが聞こえた気がした。

多分、気のせいだと、信じたい。

## 一章 雪村修一（2）

俺の中で何かがうずく。

なぜ、ここに「あの子」がいるのだろうか。

彼女が、俺に忘れるな、と言っているのだろうか。

空を見上げ、つぶやいた。

「どうしたらいいのだろうか……」

あたしは完全に参っていた。

修一と同じ学校、しかも同じクラスになっただけではなく、まさか彼に好意を寄せる人物に出会ってしまうなんて……。しかも、その子は「あの子」みたいに小動物ちっくで愛らしく、思わず抱きしめたくなるくらいの女の子だった。

なんとか、彼女、笠原なのかに修一のことを諦めさせたいのだけれど、一筋縄ではいかないみたい。むしろ、なのかと一緒にいると彼女の恋を成就させてあげたくなくなっちゃう。もしかすると、そうするのが修一にとっても一番良いのかもしれない。

……でも、あたしは踏み切れない。

「吉川さん」

修一が他人行儀にあたしの名前を呼ぶ。過去との断絶が、彼の痛みがひしひしと伝わってくる。せっかく、髪も染めて、あの土地も離れて、新しい生活を始めたというのに、これではあたしの方が先に倒れてしまいそうだ。

「ねえ、雪村……」

だからあたしは、なのかのいないタイミングを見計らって何気な

く聞いてみた。

「何？」

「部活とか……入らないの？」

ぴくりと眉が動き、彼が貼り付けていた笑顔が崩れる。

「……バイトがあるからね」

それでも、冷静を保って言葉を続ける修一の姿は、まだ完全に「あのこと」を吹っ切れていないことを示していた。

「そう」

「うん」

彼は、間違いなく雪村修一だ。名前を見たときは、同姓同名の別人だろうと思っていたし、同じクラスになって顔を見たときも、まだ別人だと信じたかった。

でも、彼はあたしがよく知る雪村修一その人だった。

小学校、中学校と一緒に過ごし、あの日「大きな傷」を負った雪村修一だ。

「あたしは……」

話が終わったと思い、立ち去ろうとする修一に声をかける。呼び止められて振り返る修一を見て、口を開こうとしたとき、なのかが教室に戻ってきたのに気づいた。

「何でもない。行って」

急かすようにそう言うと、修一は、あたしに背を向けて自分の席に戻っていった。彼はいつまで演じ続けるのだろう。あたしの前でも、ずっと演じ続けるのだろうか……。

雪村修一という、同じ名前で、これまでと全く違う人物の役を。

あたしは彼にとって、ただの「クラスメイトA」になってしまったのかもしれない。

では、彼は？

あたしにとつて、彼は、ただの「クラスメイトB」になってしまった？

それは違うと思いたい。

今でも、修一はあたしの「親友」のはず。

そこだけは疑いたくなかった。

俺にとつて、「あいつ」は何なのだろうか。

かつては確かに「親友」だった。

では今は……？

俺たちは、一日に言葉を数回しか交わすことのない、「クラスメイトA、B」になりさがってしまったのだろうか。

## 二章 踏み込めない場所（1）

「……僕はもう陸上はやりません」

「いや、しかしな。勿体無いとは思わんか？ 何も部活をやっていないんだらう？」

「バイトをしていますから、放課後は忙しくて」

「でも、うちには桜井もいる。お前たち2人が入れば、互いに切磋琢磨しあつてだな」

「興味ないですから」

「……」

「失礼します」

「ま、考えておいてくれよ」

慌てて隠れる私は、端から見るとただの不審者だったに違いない。数学の質問をしに職員室に向かったのはいいけれど、中から聞こえてくる雪村君と林先生の会話に足が地面に張り付いたみたいになくなってしまった。

職員室から出て、私に背を向けて教室に戻る雪村君を見ながら、私はなんだか寂しい気持ちになった。

（もう、陸上はやらないんだ……）

そう思うと、今度は自然に足が地面を蹴った。

「ゆ、雪村君！」

私の声に雪村君が振り返る。柔らかに微笑んだ彼の顔は、いつもの彼だった。

「何？」

「り、り、陸上、やらないの？」

私がそう問いかけた後、彼が浮かべた表情のない顔。それを見て私の心臓は飛び跳ねた。今、目の前に立っているのは本当に、あの雪村君なのだろうか。

「なんで？」

抑揚のない声。それが私の恐怖をさらに加速させる。

「え、えっと、こ、この前の体育の授業で、あ、ああ足が、速かったから……」

それはしてはいけない問いだったのだろうか……。雪村君はすつと顔を上に向けた。どこまでも広がる青い空がそこにあり、彼は眩しそうに目をひそめた。

「陸上は“嫌い”なんだ」

「……え？」

聞き返す私に、雪村君は小さく笑って口を開く。

「バイトが忙しいんだ。だから部活はやらない」

「そ、そっか」

「うん。じゃあ、僕は先に戻るから」

そう言っつて再び雪村君は私に背を向けた。

私の聞き間違いでなければ、彼は確かに言った。

陸上は嫌い、だと。

私はそれを聞き間違いだと信じたい。私が好きになった雪村君は、陸上が好きのはずだ。彼は中学3年生のときに、100mと400mリレーの2種目で全国大会を優勝しているほどの選手だ。当時、私は彼の写真が載った新聞記事を見て自分のことのように喜んだのだ。そんな彼が陸上を嫌いはずがない。

それに、彼は自分の口で言ったのだ。

あの中学2年の県大会　　。

彼は私に言った。

「だって、陸上が好きだから」と。



数学の質問をする気も失せ、とぼとぼと教室に戻っていると後ろから声をかけられた。

「なのか、何かあったの？」

葵だった。いつもより元気がない私を心配してくれているのか、いつも強気な顔が少しだけ弱々しい。

「ん〜ん。大丈夫」

「そう。それなら良いんだけど」

葵はいつからここにいたのだろうか。さっきの私たちの会話を聞いていたのだろうか。

「今日の英語の宿題難しくなかった？」

「ん〜、まあまああってところじゃない？」

聞きたいことはたくさんあったけれど、口から出てくることは他愛のないどうでもいいことだった。

「じゃあ、後で答え合わせしようよ」

「写す気じゃないでしょうね？」

「えへへ」

「えへへじゃないわよ。……しょうがないわね。教室に戻ったらノートを貸してあげるわ」

「ありがとう」

「ジュース一杯でいいわ」

「えー」

「嫌ならいいんだけど？」

「いえ、そんなことはありません」

「じゃあ、契約成立ね」

そんなくだらない会話をしながら教室に入る。そこに雪村君の姿はなく、私は少しほっとした。足を止めて、彼の席を見つめる私によそに、葵はたたと自分の机にかけていく。私ものろのろと自分

の席に向かい、ため息と共に腰掛けた。

「はい、これ」

「ありがとう」

私は葵からノートを受け取ってぺらぺらとめくる。もはや宿題どころではなかった。いったい雪村君はどうしてしまったのだろう。

「……………ん？」

ふと、私の目がノートの片隅に止まった。

「これは？」

そこには、走り書きのような葵の字でこう書かれていた。

あなたには踏み込めない場所がある。

でも、そこはあなたに踏み込んで欲しい場所でもある。

これはどういう意味だろうか。

それが私に対するメッセージなのか。それとも葵がなんとなく書き綴っただけなのか……………。

それを判断できるほど、私は葵のことをよく知っているわけではなかった。

今の私にとって、葵は多分ただの「友人A」に過ぎないのだろう。

## 二章 踏み込めない場所(2)

「り、り、陸上、やらないの?」

その問いをしてはいけない。あたしは思わず飛び出したくなるのをぐつと堪えて成り行きを見守った。

もしかすると、なのかが修一を救う鍵になるかもしれないから…。

「なんで?」

修一が抑揚のない声で答える。これはまずいのではないかしら。

「え、えつと、こ、この前の体育の授業で、あ、ああ足が、速かったから……」

動揺するなのかはとても可愛かった。けれど、今はそんなことを考えている場合ではないと思ひ直し、慌てて首を振る。

「陸上は“嫌い”なんだ」

彼は確かにそう言った。全身を何か貫いた感覚。それは痛みと  
いうよりも悲しみだった。

嫌いなはずはない。

……でも嫌いになる理由はある。

あたしはしばらく呆然として、その場に固まった。

彼の傷はまだ癒えていない。あの日からまだ1年も経っていない。傷が癒えるにはあまりにも短い期間だ。

しかし、彼が自分を責める理由はないし、多分、それは修一にも分かっていてる。

「あなたのせいじゃない」

それは、「彼女」が彼に言わなければならぬセリフだったのだ。

はっと気づくと、そこになのかの姿はなかった。あたしは急いで後を追いかける。彼女は肩を落としてとぼとぼと歩いていたため、すぐにつかまえることができた。

「なのか、何かあったの？」

できるだけ不自然にならないように注意しながら、あたしは後ろから声を投げかけた。

「ん〜ん。大丈夫」

小さく笑うなかにはいつもの元気がなかった。それでもあたしはあたかも安心したかのように、ほっと息をつく真似をした。

「そう。それなら良いんだけど」

「今日の英語の宿題難しくなかった？」

「ん〜、まあまあつてところじゃない？」

言いたいことはたくさんあったけれど、口に出てくることは他愛のないどうでもいいことばかり。

「じゃあ、後で答え合わせしようよ」

「写す気じゃないでしょうね？」

「えへへ」

「えへへじゃないわよ。……しょうがないわね。教室に戻ったらノートを貸してあげるわ」

「ありがとう」

「ジュース一杯でいいわ」

「えー」

「嫌ならいいんだけど？」

「いえ、そんなことはありません」

「じゃあ、契約成立ね」

そんなくだらない会話をしながら教室に戻る。そこに修一の姿はなかった。多分、屋上だと思う。どうやら彼は、いつも空の向こう

にいる「彼女」を見ているらしかった。

彼がいないこと。今はそれが好都合だった。なのかに何かを伝えたい。そう思ったあたしはなのかが呆けている間にささっと机に戻ると、ノートに一言ほど書き連ねた。

「はい、これ」

「ありがとう」

なのかにノートを手渡す。後はなのかがどこまであたしの意図を理解してくれるかどうかだ。

ぺらぺらとノートをめくっていたなのかの動きが止まる。きつと、あたしが書いたあれを見つけたのだろう。

あなたには踏み込めない場所がある。

でも、そこはあなたに踏み込んで欲しい場所でもある。

さあ、彼女にはどれだけ伝わっただろうか。

なのかがあたしの「親友」なのか「友人B」なのかによって、全ては変わる。

なのかはあたしの何なのかしら……。

あいつはいったい何を考えているのか。

あの子がなぜ俺に構うのか。

俺には理解できない。

もう、陸上はやらない。やりたくない。

あのトラックを見ると、あのスパイクを見ると、吐き気がする。  
放っておいてくれればいい。

放っておいてくれ！

### 三章 あの夏の日(1)

中学二年生の夏。

友だちが県大会に出場するから応援に来てくれ、というので、面倒くさい気持ちをこらえて応援をしに出かけた。もともと陸上競技になんて興味はなかった。ただ走るだけのスポーツのどこに面白さがあるのかがよくわからなかったし、そもそも運動音痴の私は走るのも好きじゃないから、よくやるな、くらいにしか思っていなかった。

「あ、来てくれたんだ」

私の顔を見て、満面の笑みを浮かべる夏美。他の選手に比べると低いほうだけれど、私に比べると身長は高い。小学校のころからの友だちで、彼女は100mとハードルに出場する。

「まあ、夏美が県大会に出るなんて、もう二度とないかもしれないしね」

「ひどーい」

ふてくされながら笑う夏美は本当に無邪気で明るい子だ。私はその表裏のなさそうな明るさに惹かれて彼女と友だちになった。

「とにかく頑張ってるね。せっかく来たんだから」

「もちろんだよ」

アップがある、といって駆けていく彼女を見送ってからスタンドに上る。県大会といっても、私たちの住んでいる県がそれほど大きな県ではないせいか、それとも陸上の人気が低いせいか、スタンドの人影はまばらだった。しかも、そのまばらな観客のほとんどは顧問や陸上部員、あるいはその家族で占められているみだった。

私は適当に空いている席に座ると、はあ、とため息をついた。

こんな暑い中、私はいったい何をやっているんだろう……。

そんなことを考えていると、前の席に座った他校の生徒たちが小さく歓声を上げるのが聞こえた。これは、確か近くの中学校の制服だ。

「桜井君の番だね」

「うん。あ、あれ？ あの隣の人、去年ハードルで……」

「本当だ。……えっと、今年もちゃんと出てるよ、ハードル」

「へえ。今年は勝てるよ、いいね」

「そうだね。去年はかわいそうだったもんね」

その会話の意味はよく分からなかったが、私は視線を電光掲示板へと動かした。男子100m予選。3レーンにサクライユウヤと書かれている。前の女子が話しているサクライ君とは彼のことだろう。

……では、隣の人とは？

「桜井君！ がんばれ！」

「いつけー！」

彼の隣がいったい誰であるのかを確認する前にレースが始まった。3レーンのサクライ君と“隣の”4レーンの人がほぼ横一線でゴールを駆け抜けていく。

スタートのピストルの音が鳴ってからゴールまであっという間だった。かなり大げさなたとえだけれど、瞬きをしている間くらいに感じられた。

「……すごい」

私は思わずそう漏らしていた。

たった10秒程度のレースだけれど、選手にとってそれはとても長いレースなのかもしれない。これまで積み重ねてきたものを全て、たった100mのために出し切る戦い……。スタートからゴールまで、単純に走るだけのかけっことは違う。

そこにはれっきとした本気の勝負があった。



「あー、やっぱり雪村君も速いね」

「去年は1年生で厳しかったけど、今年は2人とも決勝に残るかもね」

「うんうん」

電光掲示板に結果が表示される。1位で入ったのはサクライユウヤ。その下に100分の2秒差で2位に入った4レーンの人の名前が表示されている。

ユキムラシユウイチ。

私の頭に、彼の名前が刻み込まれた瞬間だった。

女子の100m。夏美は見事に予選で負けた。

「本番は明日だから！ 私はハードルが本職だからっ！」

今にも泣きそうな瞳でそう叫んだ夏美は悔しそうに口をゆがめた。確かに彼女の言うとおり、100mはギリギリで県大会の出場権を獲得したらしいが、ハードルは違う。ハードルは地区大会で1位。タイムを見ても上手くいけば県で優勝できるくらいだと言っていた。

「だったら、明日だけ来れば良かったよ」

「ひどーい。いいじゃん、どうせ暇だったんでしょ？」

「まあ、そうだけど……」

別に、今日来たことを後悔していたわけではなかった。むしろ、

今日来て良かったくらいだった。

「せっかくだし最後まで見ていくつもりだけど、夏美はどうするの？」

「私も先輩たちの応援があるから最後までいるよ。100mの決勝は絶対に見たいしね」

「ふん」

「なんだかんだ言っても100mはやっぱり盛り上がるしね」

「そだね」

そんな私を見て、夏美はにやつと笑った。私は背筋がぞくつとして身震いをする。

「どうしたの？」

「んん。なのかも陸上に興味を持ってくれたのかと思って」

「……別に」

「楽しいよ」

「ん？」

「だって、私、陸上が好きだもん」

「そう」

そんな笑顔で言われなくても分かっている。夏美は陸上が大好きなのだろう。遅くまで残って誰よりも練習しているし、県大会出場が決まったときの喜びようといったらもう言葉にもできないくらいだった。

「ま、楽しんでいくよ」

「うんうん。それで良いよ」

そう言っただけで夏美は手を振りながら駆けていった。ただの応援という気楽な私とは違って彼女は陸上部員としてここに来ている。油を売っているわけにはいかないのだ。

いよいよ今日の種目も佳境に入った。

男子1000m決勝が始まる。

決勝を走るのは8人。ほとんどが3年生の中、2年生が2人、そのスタートラインに並ぶことになった。

2レーンにサクライユウヤ君。7レーンにユキムラシユウイチ君。さっきの2人だ。

「しゅーいちいー!!」

ユキムラ君の名前がコールされると、私のすぐそばで耳をつんざかばかりの声が聞こえた。立ち上がってはしゃぐように歓声を送っているのは、見慣れない制服を着た他校の女子だった。隣にいる大人っぽい人がその様子を見て呆れたようにしている。声を上げるその子は、私と同じくらいの身長しかない女の子で、やや幼い印象を受けた。ポニーテールの髪が背中の中真ん中あたりまで伸びていて、彼女が飛びはねるたびにそれが左右に揺れた。

選手全員のコールが終わり、選手たちがスタートの体勢に入る。会場全体が静まり返りそのときを待つ。私もやけに鼓動が高まるのを感じた。この静けさが、会場の一体感を表しているようで、びっくりするくらい心地よい。

ふと、本当に何気なく、先ほどの彼女をちらりと盗み見た。

……前言を撤回しなければいけないなくなった。

幼いなんてとんでもない。先ほどまでとは打って変わって真剣な眼差しでレースを見つめる彼女の顔は、明らかに私よりも年上の女性のものであった。

そんな余計なことを考えている間に、ピストルの音が鳴り、歓声が響き渡る。私も視線をレースに戻す。目は自然とユキムラシユウ

イチ君を追っていた。ポニーテールの少女は、喉が枯れるくらい大きな声で彼の名前を呼び、その隣の子も必死に声援を送っている。

「が、がんばれー！」

思わず私は叫んでいた。いったい、なんで彼を応援しているのか。それはよく分からなかった。

結果は、サクライ君が3位、ユキムラ君が4位だった。レース後に2人が手を取り合っている姿や、あの子がユキムラ君に何か声をかけているのを横目に私はふらっとスタンドを出た。

初めて見る生の決勝レースは、たとえ中学生のものであったとしても、かなりの衝撃を私に残した。何かに本気で打ち込んだことのない私にとって、彼ら、そして夏美はとても遠くに感じられた。

(あの子は、ユキムラ君の彼女なのだろうか……)

無意識に全く関係のないことが頭に浮かび、慌てて首を振った。

### 三章 あの夏の日(2)

100mは3位だった。桜井にも負けた。これではまだまだだと思ふ。そうは言っても、まだ2年生。俺には来年がある。だから、今は悔しいけれど、それをバネにすれば良い。それだけのことだ。

まあその前に、明日にはハードルもあるのだが……。ハードルは去年のことがあるから、少し不安だ。怖くないといえは嘘になる。でも、今年はずぐみがある。

「彼女」がいれば頑張れる気がした。

今日も応援に来てくれた。

明日も応援に来てくれるらしい。

絶対に良いところを見せたい。  
頑張ろう。

次の日。

夏美は朝から真剣にハードルの練習をしていた。普段はのんびりしているようなタイプなのに、今は違う。

今の夏美はきつと、私とは違う世界が見えているのだ。

「ちゃんと見てよ」

予選の前に、私にそう言うてから夏美はレースに向かった。はい

はい、と適当に相槌を打ってからスタンドに向かう。

何気なく首を動かすと、ユキムラ君の応援に来ていた昨日の2人組がいた。私は彼女たちに気づかれぬように、3つ隣の席に腰掛けた。

男子110mハードルの予選が始まる。

「しゅーいつちー！」

「余裕じゃん」

2人が身を乗り出して叫ぶ。予選を1位で通過したユキムラ君は、笑顔で2人に手を振っていた。凄かった。昨日の100mも凄いと思ったけれど、それとはまた違うものがあつた。気迫というか、情熱というか……それとも執着心とでもいうのだろうか。ハードルに賭けるユキムラ君の思いは、100mとは比べ物にならないのではないか、と想像された。

何かに本気でぶつかれるユキムラ君と、そんな彼を見つめる彼女の顔を見て、私は心の底から、羨ましいな、と思った。

夏美も順当に予選を通過し、ブイサインを作って笑顔をこちらに向けてくる。

「おめでと」

私もそう答えて手をたたいてあげる。夏美は照れくさそうに、

「まだ予選だから！」

と叫び返してくれる。予選も決勝もない。私は、一生懸命にやっている夏美が本当に輝いて見えた。

「頑張れ」

だから、そう言った。真剣な思いでそう言った。すると夏美はきよんとした顔をして、小さく笑った。

「任せて」

結果から言うと、男子のハードルはユキムラ君が制した。隣ではあの女子二人組が大声で騒いでいた。私も無性に喜びたい気持ちを抑えて、電光掲示板に眼をやった。

一番上に、彼の名前があった。

ユキムラシユウイチ シラカゼ

何気なく見ていたけれど、そういえばシラカゼなんて聞いたことがない。これは県大会だから私たちの住む場所と地区が全く違うのだろうか。

シラカゼ中学、シラカゼ中学、私はそれを忘れないように頭の中で連呼し、二人組の制服姿を眼に焼き付けた。

なぜ、こういった行動をとったのかは分からない。もしかすると、もう既にこのときから私は彼に惹かれていたのかもしれない。

「夏美ー！」

つづいて女子のハードル決勝が始まる。夏美は4レーン。彼女曰く、

「この位置をもらえるってことは、凄いことなのー！」

らしい。私にはよく分からないから別に良い。とにかく、頑張つて欲しい。あの二人組もレースに注目している。このレースにも知り合いが出ているのだろうか。

ピストルの音が鳴る。夏美がスタートした。1台目を越えていく。私はハードルのことはよく分からないから、あれが上手なのかどうかは分からない。2台目。順位は真ん中辺り。大丈夫、ここからだ。3台目。

「夏美っ！」

私が思わず立ち上がったのは、夏美が転倒したからだった。ハドルに足をひっかけて転んだ。そして、そのまま起きてこない。

「夏美!？」

スタンドの最前列まで駆け寄って、もう一度、彼女の名前を叫んだ。夏美が小さく動くのを見て、意識を失っているわけではないことが分かり少し安心したけれど、右の膝辺りに血がにじんでいるのが見えた。役員らしき人が出てきて、夏美を運んでいく。私も急いでスタンドを下りた。医務室はどこ？

私が医務室に入ったとき、夏美は足に包帯を巻かれているところだった。

「打撲か何かじゃないかな？ 大丈夫だから、そんな顔をしないで」

夏美はそう言って、手をひらひらとさせた。膝を打撲し、さらにトラックで擦り傷を作ったのか、うつすらと血もにじんでいる。

「だ、大丈夫なの？」

「だから、大丈夫だって、ね？ ……それで、ごめんけど一人にしてくれないかな？」

「……え？ う、うん、わかった」

私は夏美の瞳が揺れるのを見て、なんともいえない気持ちになった。夏美は泣きたいほど悔しいのだ。

でも、私が目の前にいるから泣けないのだ。

「じゃ、じゃあ、外で待つてるから、ね」

「うん」

私はそんな夏美を置いて外に出る。扉に背をかけると、中から嗚咽が漏れた。



私は涙を見せられない程度の友人なのだろうか。自分の弱さを見せることができない程度の友人なのだろうか……。

無意識のうちに、そう考えてしまった自分が醜くて、悔しくて、私は涙を流した。

「どうした？」

そんなときだった。彼が声をかけてくれたのは……。

「と、友だちが、怪我をし、しちゃって……」

慌ててそう言ったのは、自分の中の汚れた部分を彼に知られるのが怖かったからだろう。

「ああ、さつきこけた子のこと？」

「う、うん」

ユキムラ君は首にかけたタオルを私に手渡してくれた。私は涙でぐちゃぐちゃの顔を見られたなくて、彼から顔を背けた。

「まあ、とりあえず泣くのやめたら？」

私は受け取ったタオルで顔をごしごしとこすった。汗のにおいがした。

「泣くほど心配するなんて、よっぽど大事な友だちなんだな」

「え……う、うん」

本当にそうなのかは分からなかった。果たして夏美は私の「友だち」といえるのだろうか。

「きつと大丈夫だよ。俺も去年こけたけど、今はこうして走ってるし」

「え？」

昨日、前の席の子達が話していたことを思い出した。

『うん。あ、あれ？ あの隣の人、去年ハードルで……』

『本当だ。……えっと、今年もちゃんと出てるよ、ハードル』

『へえ〜。今年は勝てるの良いね』

『そうだね。去年はかわいそうだったもんね』

そういうことだったんだ。ユキムラ君は去年、夏美のようにこけて悔しい思いをしたんだ。

「俺は軽い打撲で、ほら見て。ここスパイクでここに傷がついたやつたけど、陸上生活に特に支障はなかったし」

ユキムラ君の左足には、確かに引っかけ傷のような痕があった。

「ま、俺と全く同じような怪我がどうかはわからないけど」

「どうして、そんな怪我をしても、まだ続けたいって思えるの？」

「ん？」

「なんで、そんなに本気で頑張れるの？」

見ず知らずである私のいきなりの問いかけに驚いたのだろうか。

彼は小さく、うくん、と唸ると、恥ずかしそうに頬をかいた。

「だって、陸上が好きだから」

「……そっか」

私は彼が渡してくれたタオルをぎゅっと握ったまま、俯き加減に答えた。

「しゅーいち、何やってんの？ みんな呼んでるよ！」

遠くからあの子の声が聞こえた。彼がそつちを振り返り、手を上げた。

「あ、ごめん。俺行かなきゃ。そのタオルはあげるから。じゃあね」

「あ、うん。ありがとう」

彼が背中を向けたとき、私はようやく顔を上げることができた。

泣き顔を見せまいと俯き続けたせいで、彼は多分、私の顔をきちんと見ることができなかったはずだ。

ユキムラ君の背中の上に、あの子はいた。長い黒髪を揺らす可愛いらしい少女。

あの子がユキムラッシュウイチの「ヒロイン」だった。

### 三章 あの夏の日(3)

なんとか勝って良かった。

つぐみの前で良い格好もできた。

今日、女子の100mハードルで一人の子が転倒した。

去年の自分を見ているようで、俺は思わず医務室へと足を向けていた。

でも、俺は中に入ることはできなかった。

泣いている女の子がいたからだ。

彼女は友だちのことを思って泣いていた。

そこで俺は慣れないことをしてしまった。

自分のタオルを差し出すなんて、くさいことを……。

なんであんなことをしたのか、帰り道につぐみと手をつないで歩きながら考えた。

多分、あの子がつぐみに似ていたからだと思う。

どこが、というと答えに窮するけれど、

多分、雰囲気似ていたんだと思う。

つぐみもきつと、葵が怪我をしたら泣くだろう。

俺には、その顔を決して見せないように隠しながら……。

あの一件があつてから、夏美は陸上をやめた。

「どうして、やめるの？」

退部届を提出した日、私の問いかけに夏美は首を横に振った。

「もう、無理なの」

夏美は明らかに私を拒絶していた。しつこく問いただすことは、さらに私たちの関係を悪化させるであろうことは容易に想像がついた。でも、私は衝動を抑え切れなかった。

「陸上が好きなんじゃないの？」

その問いかけがトリガーになつた。

「分かつたようなこと言わないでよ！」

突然、ヒステリックに叫んだ夏美は私の胸倉を力いっぱい搦んだ。「いつも適当に過ごしているあんたに、本気でぶつかつてた私の悔しさや惨めさは分からないわ！」

そう言われて気づいた。

私は別に彼女が陸上をやめた理由をそこまで知りたいわけではなかったのだ。そういう風に心配している振りをしていたに過ぎなかった。

私はユキナの「友人」ではなく、ただの「クラスメイト」なのだと痛感したのは、そのときだった。

私には果たして「友人」と呼べる人がいるのだろうか。自分の部屋のベッドに寝転がり、ユキムラ君からもらつたタオルを眺めながらたまにそう考えることがあつた。

きつと、誰もがよく分からないまま日々を過ごしているのだと思う。それを考えると、なんだか寂しくなるので、私はすぐに考えるのをやめて目を閉じた。

あの日の彼の走る姿が思い出される。本気で陸上に打ち込む彼の姿を私は羨望の瞳で見つめていた。

私にも何か、本気でぶつかれるものが欲しい。

運動は苦手だ。絵も歌も得意ではない。芸術的センスは皆無だ。だったら勉強は？ 勉強か……。一番やる気のない言葉だった。

私には、本気になれる情熱が足りないのだろうか……。

ふと、思い立った私は、ベッドから跳ね起きると部屋を出て1階へと降りていく。うちにはリビングに1つパソコンが置かれている。

私はそれを起動させインターネットに接続した。検索するのは、あの学校。

私は慣れないキーボードに少しばかり苦戦しながらも「白風中学校」と入力した。

あの大会の後、私は普段は読まない新聞を広げた。

県大会のことは小さい記事になっていた。上位入賞者の名前が載っていて、そこに彼の名前があった。

一位 雪村修一（白風）。

私はそこで、ユキムラシユウイチという名前はこう書くのだと知った。シラカゼも白い風と書くのだと知った。

……ついでに、サクライユウヤは桜井侑哉と書くことも知った（これは本当に偶然だった。新聞には各種目上位3名までの名前が記載されており、100m走で3位に入った彼の名前が目映ったのだ）。

彼の名前と学校が分かり、そのときはそれで満足だった。

でも、今は違う。

無性に、彼のことがもつと知りたくなった。

調べてみると、白風中学とうちの通う学校とは地区が違うどころか、県内の両極端に位置することが分かった。

「ダメだ……」

この距離に行くには、かなり勇気がいる気がした。ちょっとでもいいから彼の顔を見れば、少しは頑張れる気がした。

けれど中学二年生の私にはまだ、そこまでの度胸も、それからお金もなかった。

何の目的も定まらないまま中学三年生になり、また夏がやってきた。去年、彼に出会った夏。

もしかすると、これが最後のチャンスなのではないか、と思った私は昨年までの怠惰な自分が嘘であったかのように行動力を発揮し

て、いそいで計画を立てた。彼がどの種目で出場するかは知らない。分からない。だから、2日間かけて行われる県大会の両日行こうと決めて家を出た。

今回は「友人」の応援ではない。「好きな人」の応援だ。

その県大会で、驚くべきことに雪村君は100m・110mハドル・4×100mリレーで三冠を達成した。もちろん、あの「彼女」も応援に来ていた。嬉しそうにポニーテールをびよこびよこ揺らしながら、彼にお祝いの言葉を投げかける。

私もちよつとでいいから彼と言葉を交わしたかった。けれど、それは叶わなかった。

私はここまでできたせに、あと一歩が踏み出せなかったのだ。

……けれど、彼の声を聞くチャンスは転がってきた。

リレー終了後、私も帰ろうと腰を浮かし、スタンドを出たときだった。聞きたくて仕方がなかった声がすぐそばから聞こえたのだ。

私は、さっと物陰に隠れて、こつそりと声のするほうをうかがった。

「100mくらいは譲ってくれよ」

「県大会で負けたくらいで、小さいこと言うなよ」

そこにいたのは、雪村君と桜井君だった。

「あー、そうか。全国で勝てばよいのか。それまでお前を天狗にさせておいて、最後の最後でその鼻をへし折ればよいんだな」

顔いっぱいを使って笑った桜井君を見て、雪村君は視線を遠くに飛ばした。

「まあ、中学で終わる気はないけどな」

「高校か……」

「お前、どこ受けるの?」

「俺? 多分、光葉」

「光葉つて、光葉学院？ お前そんなに頭良いの？」

「学年一位です」

「へえ……すごいな」

「おうよ。勉強ではさすがに俺の勝ちだろ」

桜井君は光葉学院を受験するらしい。県下有数の進学校としても有名なそこは、部活動にも力を入れており、文武両道を目指す学生が多く集まる。

「修一は？」

「俺？ 俺は、あんまり考えてないけど、近いところが良いかな？」

あるいは……」

「ああ、××（ここは聞き取れなかった）か。実は俺もそこか光葉かで迷ってる」

「お前はどっちも近いから良いけど、俺は家からだ遠いからな。」

……遠いのは嫌なんだよなあ」

「なんでよ」

「だって通うのが面倒くさいだろ」

「ははっ。お前らしいな」

聞き取れなかった部分もあったけれど、どうやら雪村君は近所の学校を受けるみたいだった。それだと同じ高校に通うのは多分無理だ。私もできれば近いところがいいもの。

「しゅーいっちー！」

遠くから、雪村君を呼ぶ声が聞こえる。この声は「彼女」の声だ。

「お、彼女だぜ」

「あー」

「そういえばあの長い髪は何なの？ お前の好み？ めちゃくちゃ綺麗じゃん。レース後にお前に話かけにくるおかげでいつも目に入るけど、スタンドの風に靡いてる“あれ”は反則的だな」

「一応忠告しておくけど、あいつだけは絶対にそんな目で見るなよ？ 冗談抜きでただじゃおかないからな？」

「分かってるって」



「はあ……とりあえず信用してやるよ。……まあ、髪についてはそんな感じだな。手入れが大変だつてぶつぶつ文句言う割には、いつまで経つても切らないでいてくれる」

「ラブラブなんだな」

「どうかかな？」

「ま、いいや。じゃあ行つてやれよ」

「ああ。またな」

「おお」

雪村君が彼女の元へ駆けていく。

彼は髪の長い子が好きらしい。私は肩にも届かない自分の髪に触れ、今日から長く伸ばそうと誓った。

「あ、そうだ」

途中、雪村君が足を止め、桜井君を振り返った。

「ちなみに俺も学年一位だから」

「あ？」

「俺の方が小さい学校だから、そこまで対抗できてないかもしれないけど、別に勉強はお前の勝ちってわけではない。俺だって光葉に受かる自信はある」

にやつと笑った雪村君は、とても子どもっぽかった。それを聞いた桜井君がふてくされたように叫ぶ。

「そういうのは黙っておけよ。この大会で完敗した俺に花を持たせてくれても良いだろ？」

「嫌だね。俺は負けず嫌いなんだ」

大声で笑いながら、雪村君は今度こそ彼女の元に駆けていった。その姿を見ながら桜井君は髪をくしゃっと掴み、微笑を浮かべたまま誰にも聞こえないくらいの声でつぶやいた。

私の耳には届いたのだけれど……。

「くっそー。部活も勉強も本気出してはるはずなんだけどな……。あ

いつは化け物か」

部活も勉強も本気出してる。

その言葉は私の胸にずしりとした痛みを伴ってぶつかつた。部活もやっていないし、勉強も平均点よりちょっと上くらいの私は、彼らから見て、なんてつまらない存在なのだろう。

私にも何かできるだろうか……。

どこまでできるのかは分からないけれど、私は近場で最も偏差値が高い高校である「光葉」を目指すことに決めた。今の私のレベルでは到底受かるはずのないそこに受かることで、私は自信をつけたかったのだ。

自分も本気で何かをやることで、彼に少しでも近づけると思った。

きっと私は雪村君の背中を追っていきたかったのだと思う。

それから数カ月後の、中学3年生の全国大会。

その結果を私は新聞で知った。二冠の雪村君は満面の笑みで写真に写っていた。

私はそれを見て自分のことのように嬉しくなって満足し、そのまま新聞を閉じてしまった。

受験に向けて、これまでにないくらいの集中力で勉強をしていた私は、それ以上、新聞を読むことに時間をかけたくなかったのだ。

だから、その日の新聞にある程度大きな記事で載っていたにも関わらず、「あんな事件」があつたことを私は知らなかった。

#### 四章 橋本つぐみ(1)

高校に入って初めの中間テストが終わった。さすがは光葉というべきか、私は平均点を越えたり越えなかつたりという感じだった。総合点では、平均点に落ち着いた……というところだろうか。

だけど、今は私のことなんてどうでも良かった。

「……………うわぁ……………」

思わずそんな声が洩れたのは廊下に貼り出された成績上位者の名前を見たからだだった。うちの学校は、“互いに刺激し合う”ことで各々を伸ばすということをモットーにしているらしく、テストごとに上位者のテストの点と名前が貼り出されるというありがた迷惑な慣習が未だに続いている。

その4位のところに彼の名前があったのだ。

雪村修一、と。

驚くというよりは呆然とした。

光葉は1学年に8クラスあって1クラスが約40人だから、学年全体で320人という数の生徒がいる。その中の4位になるなんて、いったい彼は私のどこまで先を走っているのだろう……。

「……………え、えっと、そういうえば葵はどうだったの？」

私の隣で苦虫をかみつぶしたような顔をしている葵の方を向いてそう訊ねると、彼女はつまらなさそうに鼻を鳴らした。

「人間はね、テストの点では決められないのよ」

「……………赤点？」

「そこまでひどくはないわ」

「なんか意外だね」

「何が？」

「葵って勉強できるイメージがあるのに」

葵は少し嫌そうな顔をして、ぶんぶんと首を横に振った。

「テストで良い点とることと勉強ができることは違うのよ」

「そういうものかな」

「そういうもののなの」

私がそんな風に葵との会話を楽しんでいると、雪村君が掲示を見にこちらにやってくるのに気づいた。葵がはっとした顔になったけれど、そんなのは気にせず私は思い切って彼に近づいていった。

「あ、ゆ、雪村君？」

「何？」

いつもの笑顔で私に向き直る彼。私は早まる鼓動を抑えながら、

「け、掲示見たよ、すごいね」

と言った。まだ掲示を見ていないらしい雪村君は私の言葉を聞いて人ごみの後ろから掲示を覗き込んだ。私の身長ではこの位置から掲示を見ることは不可能だけれど、彼ならば背伸びをすればぎりぎり見えるかもしれない。

「……ん、4位？」

目を細めながら掲示を見つめる彼にそう訊ねられたので私は興奮気味に、

「そ、そう！ 4位だよ！」

と、答えた。それから彼はもうしばらく掲示をにらみつけた後「

よし」と小さくつぶやいて、こちらに視線を向けた。

「笠原は？」

「え？」

「笠原はどうだったの？」

まさか、会話が続くとは思ってもみなかった私は、

「わ、私は、ち、ちょうど真ん中くらい……かな？」

と、どもりながら答えることになった。恥ずかしい……。けれど、

雪村君はそんなことを気にもせず、小さく笑って口を開いてくれた。

「ふん。結構難しかったもんね」

「そうだよな」

そんな彼を見ながら、果たして私が見た中学生のときの彼も、こんな笑い方をしていただろうか、と考えていたときに、後ろから大きな声をかぶせられた。

「修一、どうだった？」

振り向くと、そこに立っていたのは、隣のクラスの桜井侑哉だった。中学のとき100m走で雪村君と争ったあの桜井君だ。

「……お前は？」

「まだ見てないから、聞いたんだろ？ お前もまだ見てないの？」

桜井君は、掲示の前にたかる人ごみを見ながら、ため息をついた。雪村君より少し身長の高い彼では、掲示を見ることができなかったらしい。

「これじゃ、見えないな……。とにかく、これは負けられないからな。お前をなんとか陸じよ」

「俺は4位らしい」

「うそっ!？」

桜井君は声を裏返らせて叫んだ。目を丸く見開いて、口だけを機械的に動かした。

「ホ、ホントウニ?」

「嘘をつく理由がないだろ」

「え? お、俺は?」

「知りたい?」

「そ、そりゃあな」

「6位だな」

「……」

桜井君が沈痛な面持ちで拳を握り締めた。私は彼がそんな顔をしたことよりも、目の前に学年4位と6位がいることに衝撃を受けていた。

「……な、なんて羨ましいんだろう。」

「う、嘘だろ？」

「だから嘘じゃないって」

「だって、お前、負けず嫌いだし、それに賭けの件もあるから、それで負けるのが嫌で」

「いくら負けず嫌いでも嘘はつかない。嘘は嫌いだ」

「じゃあ、この賭けは俺の負け……ってこと？」

雪村君は、ちらつと私の顔を見て、それから桜井君に視線を動かした。

「そうだな。よって、陸上部には入らない」

「ぐ……。よ、よし、分かった。次は期末で再挑戦だ」

「懲りないな」

「懲りない！」

桜井君が間を置いて、息を大きく吸い込んだ。

「俺はお前と陸上がしたい！」

廊下中に響き渡らんばかりの大声だった。桜井君が雪村君の顔を真剣な眼差しで見つめるけれど、雪村君の方は小さくため息をつくと、すつと顔をそらした。

「そうか。頑張れ」

「嫌味か」

「嫌味だ」

桜井君は悔しそうに肩を落として去っていった。残された私は、雪村君にかけるべき言葉を搜した。陸上について触れるべきか否か……。迷ったあげく、私はこう言うしかなかった。

「よ、4位なんて、すごいね」

「ありがとう」

雪村君はまたさつきみたいに小さく笑うと、私からも顔を背け、そのまま教室へ戻っていつてしまった。私はもう次の言葉が見つからなくて、すごすごと葵の元に引き返した。

「あいつ、笑ってないね」

戻ってきた私に対して発した葵の第一声はそれだった。

「笑ってない？」

「うん」

私は、雪村君の去った方に目を向ける。

そこにはもう彼の姿はなかった。



#### 四章 橋本つぐみ(2)

放課後、あたしは自分の席に座ってじっと待っていた。あいつは今日バイトが休みだ。そういうときは決まって屋上で時間を潰し、それから教室に戻ってくる。その証拠にカバンはまだここにある。高校に入学して3ヶ月目に入った。そろそろ、あたしも息苦しくなってきたところだ。

誰もいない教室で5分くらいが経ったところ、ドアが開いてあいつが入ってきた。あいつは、あたしを見て嫌そうな顔をした後、小さく“笑った”。

「まだ残ってるの？ “吉川さん”」  
万人が万人“微笑んでいる”と太鼓判を押すであろう笑みを浮かべるあいつの仮面をはぎとるために、あたしは爆弾を投下した。

「……修一」

カバンを手にしようとした修一の動作が止まる。彼の名前を呼んだのは、“あの日”以来のことだ。

「まだ、引きずってるの？」

「僕が何を引きずっているっていうんだ？」

“僕”ってキャラじゃないでしょ、あんたは。……いつまで、演じ続ける気？」

あたしは立ち上がって修一の腕をとった。思い切り力を込めて握り締めると、彼の腕が徐々に色を失っていくのが分かった。

「痛いんだけど？」

「その変なキャラ設定をやめたら離してあげてもいいわよ」

あたしは修一をにらみつけるが、彼はそんなこと気にも留めていないかのように空いている手であたしの腕を握り締めた。

「何、考えてんだ？」

背筋を凍りつかせるくらいの冷たい声だった。でも、ここで怯むわけにはいかない。

「あんたこそ、何考えてんの？」

修一はあたしの腕から手を離し、あたしにも離すように促した。ここで離すと彼が逃げ出してしまわないか不安だったけれど、あたしは大人しく彼の言うとおりにした。

修一は自分の席に腰を下ろすと、額に手を当て苦しそうに顔をゆがめた。グラウンドからは部活動をやっている生徒たちの声が聞こえる。

それ以外は何も消えない、静かな放課後だ。

「お前、何でここにいんの？」

沈黙を破って彼が放った一言目はそれだった。

「何でって……うち、引越したから」

そう。うちは中学卒業と同時に引越をした。だから、今の家から一番近い光葉を選んだのだ。修一に文句を言われるいわれはない。

「修一こそ、なんでここにいの？ 一人暮らしまでして」

「……なんで、だって？」

顔を上げた修一の瞳には炎が宿っていた。きらきらとした瞳はまるで獣のようで、すぐにでも噛み付かんばかりに、勢いよく立ち上がった。

「誰も知り合いのいない場所に行くために決まってるんだろ！ 何もかも忘れたくて！ 過去の自分とは違う自分になりたくて！ 全中のとき、侑哉はやっぱりここは受けないことにしたって言ったくせに、結局ここを受けて合格してるし！ それに加えてお前もかつ！ 絶対にもう会いたくなかったお前がつ！ 寄りによってお前がいるなんてっ！！ しかも、俺に見せ付けるように、あの子と仲良く

しやがって！！ 俺をどこまで追い詰めれば気が済むんだよ！！」

「誰が、修一を追い詰めてるって……？」

「お前らの存在がだよ！ お前らの顔を見るたびにあいつの顔が蘇る。俺が殺した、あの女の顔が！！」

あたしは思い切り修一の頬を叩いた。空気を切り裂くような乾いた音が響き渡る。

「吐き出して、少しは楽になったかしら？」

「……あ？」

じんじんする手から察するに、多分修一の頬はかなり痛いはずだ。それなのに、ただにらみつけるだけでなんの仕返しもしてこない修一を、そこは昔と変わってないんだな、と思いながらこちららみ返す。

「誰も、修一がつぐみを殺したとは思っていないわ」

「……」

「もう、良いでしょ？」

「……」

「ね？」

「……誰も、だと？」

震える声で修一が声を出す。あたしは一瞬びくりとして、小さく後ずさった。

「誰もじゃない。“俺は”俺がつぐみを殺したと思っている」

「バカね」

「何だと！」

修一があたしに向かって手を振り上げ、あたしを殴る直前でその拳を止めた。長い付き合いだから、あたしにはそれが分かっていた。修一は決して誰かに手を上げることはない。

その自信があつたから、あたしは恐れることなく言葉を続けた。

「あなたのせいじゃないわ」

修一は身体を震わせ、わなわなと唇を奮わせた。これで彼が納得するとは到底思えない。けれど、あたしはそれを言葉にして彼に与えた。

“彼女”が贈ることのできなかった、その言葉を。

言つて、少しだけ後悔した。その言葉は彼を救うばかりか、下手をするとさらに傷つけてしまった可能性があつた。

「それに、あなただけが不幸なわけじゃないわ」

これは詭弁だ。先ほど言つた言葉の強さを薄めるために出てきた言葉がそれだつた。

修一は震える身体を止めることができずに、苦痛でゆがめた顔をこちらに向けた。

「確かに、不幸なのは俺だけじゃない。……でも、俺が不幸だといふのは事実だ」

つぐみが死んで、一番苦しんでいるのは間違いなく修一だろう。

彼が、つぐみを“殺した”と表現した理由も分からないわけではない。けれど、その思いが彼の心の内を占めるのは間違っている。

自分を追い詰めて、彼女に懺悔し続けることは償いではない。

……そして、きつと、それは彼にも分かっている。

ただ、どこにもぶつけようのないその思いを外に出す術を、外に出す相手を知らないのだ。

修一は拳を下ろしカバンを手に取った。あたしは教室を出ようとする修一に向かって、もう一言投げかけた。

「雪村修一は、そんな人だったかしら」

修一は何も言わずに教室のドアを開け、そしてぴたりと動きを止めた。同時にあたしも動きを止めることになった。

しまった。 。と思うには、遅すぎた。もはや何の言い訳も浮かばない。

そこには、青ざめた顔をした「笠原なのか」が立っていた。

#### 四章 橋本つぐみ(3)

(高校生にまでなって宿題のプリントを忘れるなんて……)

せつかく途中まで帰った道のりを再び引き返しながら私は悪態をついた。葵が「用事がある」というので、今日は私一人で下校していた。部活もやっていない彼女が何の用事だろうと思ったけれど、彼女は私の「友人」であるはずだから、私はそれに従った。

教室まで戻ってきて、さあ入ろうというときに、中から大きな声が聞こえた。

それは雪村君の声であって、雪村君の声ではなかった。

「俺が殺した、あの女の顔が!!」

しかも、その内容は信じられないものだった。

俺が殺した……?

悪いとは思いつつ耳を傾けると、次はビンタの音がした。

この中に、もう一人、誰かがいる。

「吐き出して、少しは楽になったかしら?」

「……あ?」

葵だ。この教室には、雪村君と葵がいる。私は今すぐにでもこのドアを開けて中を覗きたい衝動にかられた。

「誰も、修一がつぐみを殺したとは思っていないわ」  
けれど、葵のその一言で思いとどまった。

つぐみ?

つぐみというのは、果たして誰のことだろうか。

「もう、良いでしょ？」

葵の言葉が続く。

「ね？」

「……………誰も、だと？」

これも雪村君が発した声なのだろうか。私は怖くなって、今度はそこから逃げ出したい衝動に駆られた。でも、足が根をはったように動かない。

「誰もじゃない。“俺は”俺がつぐみを殺したと思っている」

雪村君が、つぐみさんという人を殺した？

「バカね」

「何だと！」

大きな音がして、私は身体を震わせる。しかも、その後に驚くくらい冷静な葵な声が聞こえて、私の恐怖はさらに加速した。

「あなただけが不幸なわけじゃないわ」

「確かに、不幸なのは俺だけじゃない。…………でも、俺が不幸だといふのは事実だ」

私の頭は混乱でうまく回っていないかった。だから、彼がドアに近づいてきたときもうまく反応できなかったのだ。

「雪村修一は、そんな人だったかしら」

そして、見つかってしまった。

私に気づいて怒っているような泣いているような複雑な表情をしている雪村君と、突然の出来事に固まってしまった葵に…………。

「か、笠原さん。どうしたの？ 忘れ物？」

すぐに体裁を立て直して、雪村君が笑顔を浮かべる。さすがの私

にも、それが演じられた笑顔であることは分かった。それでも、私は気づかない振りをした。するしかなかった。

私はまだ何も知らないのだ。

「う、うん。ちょっと宿題のプリント忘れちゃって……」

「そっか。気をつけないとね。じゃ、僕はもう帰るから。また明日ね」

「あ、うん。ま、また、明日……」

逃げるように帰っていく雪村君を見送ると、教室に残されたのは私と葵だけになった。

葵は私の「友人」なのか「クラスメイト」なのか「敵」なのか、それとも「別の何か」なのか……。それを判断するときが来たのだと感じた。途端に冷静になった頭が、一気に回転を始める。

「な、なのか？」

「何、葵？」

「どこから、聞いていたの？」

「……俺が殺した、の辺りから、かな？」

葵はぎゅっと拳を握り締めて、唇をかみ締めた。ここは押すところだろう。

「つぐみさんって誰？ 葵は雪村君と知り合いなの？ 雪村君がつぐみを殺したって何？ わ、私には何も教えてくれなかったのは、な、な、何で!？」

喋り始めると、せっかく冷静になったはずの頭がすぐにオーバーヒートを迎えた。一度にまくし立てたせいか、葵はしどろもどりになりながら、とりあえず私に落ち着くように促した。

「お、おおおおお落ち着いているから！ だから、は、早く教えて」

葵は近くにあった席に腰かける。私もそれにならって葵が座った席の隣に腰掛けると、身を乗り出して葵の手を掴んだ。



「教えて、お願い……」

葵は困ったように頭をかいた後、小さく息をはき、ようやく口を開いてくれた。

「あたしは、修一と小学校、中学校が一緒だったの」

「小学校と……“中学校”が、一緒？」

「ということは葵は雪村君と9年間も一緒に過ごしたことになる。」

そうであるというのに、雪村君に対してあのような振る舞いをしていた理由は、いったい何なのだろう……。

「そう。昔はあたしと修一は“親友”だったと言って良かったと思っただけ。でも“あの事件”以来、修一との関係は“ただのクラスメイト”以下になったの」

「あの事件？」

葵はしばらく逡巡した。言うべきか言わざるべきか。何度か口を開いては閉じることを繰り返して、それから意を決したように咳払いをした。

「当時、修一には彼女がいたの」

彼女、という言葉に身体が反応する。あのポニーテールの少女の姿が浮かび、それから。

「あ……」

「どうしたの？」

「ん〜ん、なんでもない。続けて」

そうか。あの子の隣にいた大人っぽい子は葵なんだ。今は髪の毛を染めているけど、間違いない。あとき、彼女と一緒に雪村君を応援していたのは葵だったんだ。

「その彼女の名前は、橋本つぐみ」

「……つぐみ」

雪村君と並んで歩いてきた可愛らしい女の子。正直、羨ましくて仕方がなかったあの子の名前がようやく分かった。

でも、つぐみさんというのが彼女の名前ならば、さっき雪村君が言っていたことって……。

「去年の夏。全日本中学校陸上競技選手権大会最終日。400mリレーで優勝して、その結果100mと併せて二冠を達成したあの日に……修一は陸上をやめたの」

「え……なんで？」

その問いに葵は苦しそうに顔をゆがめ、しんと静まり帰った教室に響き渡る、透き通るような声できっぱりと言った。

「その日に、つぐみが死んだからよ」

## 五章 夢（1）

また、あの日の夢を見た。

次第に回数は減ってきているものの、それでも何日か置きに見る悪夢がある。

それを今日、数日振りに見た。

あれは、去年のことだ。

「修一、おめでとっつ」

「ありがと」

中学三年の全中。俺は100mとリレーで2冠を達成し、その帰り道につぐみから祝われた。

「びっくりした。すごいじゃない」

ついでに葵からも。

「まあ、この三年間は全てを陸上に捧げたようなもんだからな」

「それで勉強もできるところが腹立つわよね」

葵がジトつとした目をして、軽く俺の肩をはたいた。大げさに痛がる俺を見てつぐみはくすくすと笑う。

「この程度が両立できないでどうする？」

「うっさい！ どうせあたしはどっちもできませんよ」

「そんなことないじゃん、葵」

口を尖らせてわざとふてくされる葵につぐみがすかさずフオロ―を入れる。

そんないつもの光景が、もうすぐ崩れてしまうなんて、いったい誰が想像できただろうか……。

「あつ、しまった」

俺は足を止めてカバンをさぐった。

無い。

どうやら、この誕生日につぐみからもらったタオルを競技場に忘れてきてしまったらしい。

「忘れ物したみたいだから取りに戻るよ。先に行つてて」

俺はそう言つて身体を翻して走り出そうとするが、その服の裾をつぐみが掴み転びそうになった。

「あ、待つて。私も行く。葵も行こ？」

「えー、邪魔者はここに残ってるから、二人で行つてくれば良いんじゃないかしら？」

葵は言いながらその場にしゃがみこんだ。そんな様子を困ったように見つめるつぐみの頭を軽く叩いてから、葵に顔を向ける。

「じゃ、そのご好意に甘えさせていただきます。……少々お待ちを」

恭しく一例をした俺の脛を蹴つ飛ばしてから、葵はつぐみに視線を向ける。

「行つてきなさい」

「うん、分かった。じゃ、ちょっと待つてて」

「俺に謝辞はないのか」

その問いを無視する葵を横目に、俺はつぐみと共に競技場に向けて駆け出した。

このとき、俺は何が何でもつぐみをその場に残しておくべきだったのだ。

競技場につき、自分たちが荷物を置いて応援場所に使っていた席に戻る。もしかしたら無くなっているかも、と心配したが、それは杞憂だったようでその場にタオルはちゃんと残っていた。

「あ、あつた」

俺は安堵のため息をつき、それを首にかけた。それを見たつぐみも嬉しそうに微笑んで、

「あつて良かったね」

と言った。その笑顔があまりにも可愛くて思わず抱きしめそうになったが、競技後で汗臭いことを思い出し、なんとか我慢した。

この先、いつだって、彼女を抱きしめることはできるはずだから。

「じゃ、戻ろつか。葵も待ってるし」

「そうだな」

「ほら、早く早く」

「俺、結構疲れてるんだって。足もがくがく」

俺は苦笑を浮かべて、つぐみに手を引っ張られていく。全国大会終了直後だ。肉体的な疲労だけではなく精神的なものもあつて、俺はかなり疲れていた。

もしかすると、それも一因になったのかもしれない。

戻ってきた道を俺たちは早足気味にまた戻っていく。跳ねるように駆けていくつぐみと、その手をしっかりと握り締めて、呆れ顔で

ついてく俺。

そのとき、確かに俺たちは幸せだった。

突如、強烈な風が吹いた。つぐみのポニーテールが左右に大きくゆれる。つづいて、俺の首からタオルが飛び、宙に待った。

「あっ……」

風に舞い、車道を飛んでいく一枚のタオル。ひらり、ひらりと俺から離れていった”それはそのまま道路の中央付近に落ちた。

「取ってきてあげるよ」

俺が動き出す前に、つぐみはさっと駆けていった。

俺たちの手が外れた。

俺たちのつながりが外れた。

つぐみはすぐにタオルを手にし、俺に向かって微笑んだ。

……そして、誰かの悪戯であるかのように、またも強風が吹いた。

いきなりの強風に、目を瞑って髪を押さえ、その場に立ち止まる  
つぐみ。

それと同時に俺は気づいた。後方から、ありえないスピードで突  
っ込んできているトラックの存在に。

「つぐみっっ!!」

そう叫んだのが早かったか、俺の足が道路に飛び出したのが早か  
ったか、周りが悲鳴をあげるのが早かったか、はたまた、つぐみの  
身体が宙を舞ったのが早かったか……。

とにかく、次の瞬間には、俺の目の前は真っ暗になった。

その後のことは、よく覚えていない。

後から聞いた話によると、トラックの運転手は居眠り運転をしていたらしい。

つぐみは即死だった。だけど、正直、そんなことはどうでもよくて、俺はただただ涙を流すつぐみの家族や、葵、友人たちを横目に、彼女がトラックに跳ね飛ばされた後も絶対に離さなかったタオルをきつく握り締め、呆然としていた。

いったい、これはどういうことなのだろうか。

俺の目の前で起きたことは何だというのだろうか。

それに答えてくれる人は誰もいなかった……。



ようやく、俺の目から涙が零れたのは、つぐみの葬式が終わって家に帰り、ひとりになってベッドに寝転がったときだった。

## 五章 夢（2）

「その日から、修一は陸上を忘れ、ほとんど学校にも来なくなった。あたしもあれから彼と言葉を交わした覚えはないわ。だから、彼が知り合いのいない場所を求めて家を出て、光葉を受験したと聞いたときは驚いたわ」

絶句したままのなかに向かつて、あたしはあの日の全てを話した。

「でも、別に彼が罪悪感を覚える理由はないのよ」

そうしてなのかの手を握る。どこか“彼女”に似ている彼女に全てを託す。

「あなたなら、修一を救えるかもしれない」

「……私は」

そう言われてなのかは搾り出すようにして声を出した。

「私は、つぐみさんの代わりってこと？」

確かに、そう思われても仕方がない部分もある。でも、それは違う。

「最初は、そうだったかもしれないわ……。つぐみと似た雰囲気を持つあなたと一緒にいると、昔に戻ったみたいで楽しかった」

つぐみとなのかは違う。それは絶対だ。

「あなたは代わりなんかじゃないわ。あなたは笠原つぐみよ」

「……」

何も答えないのかに、あたしは恥ずかしい気持ちを抑えて口を

開いた。つぐみにも直接言ったことがないだろう言葉を、今から彼女に言う。

「あたしは、笠原なのかと“親友”になりたい」

はつとした顔で、なのかがあたしを見つめる。顔は赤くなっていないかしら。

「そして、あたしはまた雪村修一と“親友”に戻りたいの。……だからお願い。力を貸してくれない？」

「……で、でも、私に何が  
「できるわよ」

あたしはなのかの肩に手を置いた。びくつと身体を震わせるなのに、精一杯の笑顔を向ける。

「修一は負けず嫌いで、冗談は言うけど決して嘘はつかない人だから」

「……？」

「もうすぐ、体育大会があるわね」

なのかは首をかしげたまま、可愛らしく小さく唸った。勘の良さは、圧倒的につぐみの方が上みたい。

「なのかも修一に、もう一度陸上をやってもらいたいんでしょ？」

「……う、うん」

「だったら、やることは一つよ」

「へ？」

「もう。それくらい分かってくれないと、あたしの“親友”としては落第ね」

「そ、そんなこと言われても……」

おろおろするのかなかはとても可愛くて、もう少しいじめたくなつたけれど、あたしが彼女に頼みごとをしているのだ。今は我慢しよう。

いじめるのは、また今度でよい。きつとあたしたちは、もっと仲良くなれるのだから。

「いいかしら？ 作戦はこうよ」

びつくりした。

雪村君と葵、そしてつぐみさんにそんな過去があつたなんて。

雪村君が全中で二冠をとつた最高の日。その日に“彼女”が死んでしまうなんて……。そんなことがあつたら、二度と陸上をやりたいなくなるのも、少しだけ分かるような気がした。

そして彼は全てから逃げるようにして光葉を受けたにも関わらず、自分の、そしてつぐみさんの“親友”だった葵と再会してしまう。

葵が雪村君に対して、そんな態度をとっていた理由が分かった。

お互いにもう一度、近づくとができるほど、雪村君の中でつぐみさんの問題が解決していかないのだ。

全てを忘れてしまいたかった雪村君と、もう一度、全てを取り戻したい葵と……。

私に、何ができるだろうか。

葵は言った。

「自分ではどうしようもない」と。

でも、果たして葵にできないことが私にできるのだろうか。

ただ、私は嬉しかったのだ。

葵が私と「親友」になりたいと言ってくれたことが。

だから、少しだけ頑張ろうと思う。

だって、私は雪村君の「ヒロイン」になりたいから。

夢を見た。

今日、修一やなのかとあんな話をしたからだろうか。夢の中で、あたしたち三人は楽しそうに笑っていた。

いつまでも続くと信じていた、あの関係……。

「つぐみ、喉渴いてないか？」

「ん、ちよつと渴いてるかな」

「んじゃ、何か買ってくるよ、何が良い？」

「えーつと……」

「じゃあ、あたしはコーラで」

「ごめん。ちよつと何言ってるのか、全然分からない」

「なんでよ」

あたしはにやけ面の修一の頭を軽くはたいてやる。

「私は紅茶が良い！」

「紅茶ね、了解」

「あたしはコーラ！」

「じゃあ、行ってくる」

あたしの方を見ようとせせず、つぐみに向かって笑いかける修一を見て、わざときつい声を出してみる。

「……あんたねえ、いつつもそうだけど、差別はやめてほしいわ」

「失礼だな。これは差別じゃないし、たとえ差別だとしても妥当で公正な差別だ」

「どこがよ!？」

「お前とつぐみとじゃ、比べ物にならないってこと」

修一はまたにやつと笑うと、あたしの攻撃を避けて自動販売機にかけていく。

全く憎らしい。憎らしい、けど……。

「相変わらず、仲良いね」

「ん?」

「羨ましい」

「どこがよ? あんなからかうような態度とられるあたしのどこが羨ましいって?」

「修一とじゃれあえる人って羨ましい」

そう言ったつぐみの瞳はどこか寂しそうで、あたしは「彼女」と「親友」には大きな隔たりがあることを感じた。

親友には親友というポジションがある。あたしが修一を憎めない理由も、あたしが彼の「親友」だからこそその理由だ。彼は、あんな態度をとっても、絶対にあたしを傷つける真似はしない。多分、今回も……。

もし、あたしが修一の「彼女」だったなら、彼はあたしのことを“いつも”のように扱ってくれただろうか。それとも、今のつぐみのように“大事”に扱うのだろうか。

それは、どっちであってもなんだか少しだけ物足りない気がした。

「妬いてるの?」

「べ、別に妬いてなんかない！」

「相変わらず可愛いわね」

「うるさいなあ、もう！」

そう言いながら、つぐみの頬を突いて彼女の反応を楽しむ。しばらく満喫したころ、修一が走って戻ってきた。

「はい、つぐみ」

「ありがとう」

戻ってきた修一は予想通り、手に三つの缶を持っていた。紅茶と

「コーヒート……コーラ。」

「ほい、葵。120円ね」

「は？ おごってくれないの？」

「え？ おごる理由がないよね」

「つぐみにはおごったのに？」

「つぐみのは俺の意思で買ったが、葵のは頼まれたから買ったんだ。お金を請求するのは妥当だろ？」

「どうしてかしら。すごく腹が立つわね」

そういうわけで、修一の手からコーラをぶんどって、軽く、本当にかかるく彼の足を踏んづけてやった。案の定、修一は大げさに痛みがり、そして、小さく笑う。

「今度、返せよ」

「はいはい」

確かに、あたしたちはじゃれあっているのかもしれない。でも、それはいつもの見慣れた風景もはず。

それを見ながら、つぐみは何を思っていたのだろうか。

あのときはからかうつもりで、ああ言ったけれど、呆れるくらいヤキモチ妬きの彼女は、あたしにもヤキモチを妬いていたのだろうか。



修一が他の女子とちょっと話をしただけで、ぶすつと膨れる彼女は、本当にあたしにも妬いていたのだろうか。

それは今ではもう分からないことになった。

でも一つだけ確かなことがある。

修一は、つぐみしか見ていなかった。

彼の中で、彼女は絶対的な存在だった。

彼女がいるから彼は彼でいられたのかもしれない。

そして、あの日、それが欠けてしまった。

あいつと言い争ったせいだろうか。

こここのところ目を置くことなく毎晩、あの日の夢を見るようになった。

つぐみの身体が僕の目の前から消えていく瞬間ばかり、繰り返される。

悪夢以外の何ものでもない。

おかげで、寝不足になった。

眠れない日々が続き、頭もぼんやりとしてくる。

食欲もない。やる気もない。

高校に入って少しは落ち着いたと思っていた精神状態があの事件の後に戻ったようだった。

精神的にずたぼろになった俺は、この先どうすればよいのだろうか。

もう、何も考えたくない……。

## 五章 夢(3)

嫌な予感はしていた。

あれから修一の様子は明らかにおかしかった。日に日にやつれていくようだったし、あたしとの言い争いが何かを狂わせたのは確かだった。

だから今日、授業が始まって修一が教室に現れなかったとき、異様に胸がざわついた。

誰かがあたしに知らせていた。このままだと取り返しのつかないことになる、と。

「助けてあげて」と。

それであたしは今、こうして走っている。屋上へ向かって階段を駆け上る。なのかに言ったように、あたしの力ではどうしようもないかもしれない。

でも、“あたし”が“つぐみ”に頼まれた。

だから、あたしは走る。

修一まであたしの前から消えてしまわないように……。……。

屋上のさびた扉を勢いよく開けると、風が吹き込んできて、あたしは思わず目を閉じた。どこかで空き缶が転がる音がした。からんからんと、高い音が響き、あたしはゆっくりと目を開ける。

鉄柵を乗り越えて、ぼーっと突っ立っている修一がそこにいた。

「しゅ、修一！」

あたしの声なんて聞こえていないかのように、微動だにしない修一に駆け寄る。

「何する気!？」

修一が生気のない顔で振り返った。目は真っ赤に晴れ上がり、その下には隈ができている。

「……疲れた」

「な、言ってるの!？」

「お前と言い争った日から毎日、あの夢を見るんだ」

修一の瞳から涙が零れた。もう枯れきるくらいに泣いたのだろう。それでも、こうして涙は出る。

彼は限界なのかもしれない。

「最近はずしずつ見る回数も減ってきていたのに……また見るようになった。つぐみは俺を許していない。忘れさせてくれない……」

「そんなことない！」

修一の目はうつろだった。あたしを見ているようで、見ていない。その視線の先には何も映っていない。

「つぐみは、修一を恨んでなんかいないし！ 修一に生きて欲しいと思ってる！ 修一に、未来を生きて欲しいと思ってるよ！」

「何でそう言い切れる!？ お前はつぐみじゃないだろ！」

鉄柵を力の限りに掴んだ修一の手が血でにじんだ。痛みすら感じないのかもしれない。

「あたしは、つぐみの“親友”だもん！ それくらい分かるわ！！」

「くだらないことを言うな……」

「くだらなくはない！」

あたしの瞳からも涙が溢れ出した。修一はあたしの泣き顔を見るのは初めてだろうか、それとも何度も見たことがあっただろうか……。

突然泣き出したあたしを見て、少しだけ現実に帰ってきたような修一の顔を見て、あたしは何故かそんなことを考えた。

「修一は生きているのよ。あなたは、つぐみの分も生きなくちゃいけないでしょ？」

「俺は……」

修一はあたしの顔から視線をそらし、鉄柵を離れた。それからふらふらとおぼつかない足取りで、再び屋上の端に立った。

「修一っ！」

あの足取りでは、飛び降りる気がなくても落ちてしまっかもしれない。

「前に道がないことを知っているのと、道がない場所に突き出されるのとは違う。足をつこうとして、そこに道がないことを知ったと

き、彼女はどう思っただろうか「

修一は独り言のようにそう言っていると、あたしに向き直った。そして、  
かすかに微笑んだ。

その微笑みに、あたしの足は凍る。

異様なまでに安らかな微笑みは、あたしに“それ”を悟らせた。

やはり、彼を止めることは、あたしにはできない。

あたしには無理だった。

しゅん。つぐみっ。  
。

「ごめんな……」

「しゅ」

「だ、だめーっ！！」

後方から涙の混じった“彼女”の大声が聞こえたのは、そのときだった。

## 五章 夢(4)

その日、雪村君は授業が始まって教室に戻ってこなかった。葵も先生が来る前に教室を出て行った。

これは、何かの兆候なのかもしれない。

雪村君が葵と言い争っていた日、あの日から、雪村君はどこかおかしかった。何かに怯えているような、落ち着かない様子は私をひどく不安にさせた。

そんなことはない、と言いつ聞かせながら、もしかしたら、という思いが浮かんで消えていく。

『力を貸してくれない?』

葵の言葉が思い起こされた。

私に何ができるのだろうか。私に雪村君を救うことができるだろうか……。

授業が始まってしばらく経つけれど、それでも戻ってこない二人のことが気になって仕方がなく、ノートをとる集中力さえなくなっていた。

私は、思い切って立ち上がった。ガタっという音が響いて、クラス中の視線が集まる。

「先生、ちょっと気分が悪いので保健室に行ってきます」



まじめだけが取り柄だったはずの私は、この日、生まれて初めて授業をサボった。

当てがあつたわけではない。とにかくがむしゃらに探し回るしかなかった。そして、ふと思いついた。彼は屋上で空を見上げていることが多いらしい、という話を。

こんなことなら普段からもっと体力をつけておくんだ……。

私は息を切らしながら、そんな悪態をつき階段を駆け上っていく。それでも足を休ませることはしなかった。

私は今、本気で雪村君を追っている。

屋上の扉は開いていた。葵の後ろ姿が見える。その前には。

「だ、だめーっ!」

乱れた息は整わず、涙をぼろぼろ流しながら、私はあらん限りの声で叫んだ。

「な、なのか?」

振り返った葵の顔も涙で濡れていた。雪村君も突然のことに呆気

にとられているのか、その場に立ち尽くしたままだ。

「し、死んじゃだめ……」

あたしは鉄柵を握り締め、彼に言葉をかける。瞬間、彼の目が大きく見開かれ、その場に崩れ落ちた。

彼は這うようにして鉄柵に近づき、指先で私の頬に触れた。

「……つぐみ」

雪村君は私の顔を凝視し、涙で顔をぐちゃぐちゃにしながら、その名を何度も呼んだ。

「お願い。死なないで」

彼がなぜ、私を“つぐみ”と呼んだのかは分からない。けれど私は、自分がなかだろつが、つぐみだろつが関係なく、彼をここに引き止めるために必死に言葉を探した。

「……お願い」

雪村君の手が鉄柵を境にして、私の手に触れる。その手はとても冷たかった。

「俺は……。俺はもういいんだ。疲れたよ」

「何言ってるの？」

「ごめんな、つぐみ。俺の……。俺のせいで……」

私の口は自分の意志とは無関係に動いた。自分でも何を言っているんだろつ、と思った。

だから、多分、この言葉は私が言ったんじゃないんだと思う。

「修一は悪くない」

「……………え？」

「修一は悪くないから。お願い、生きて」

そこまで言ったとき、私は何かに肩を叩かれた。

それが葵だったのか、別の誰かだったのかは分からない。私は雪村君の顔から目が離せず、それを確認することができなかった。

「彼女」に勇気付けられた私は、今度は自分の意志で口を動かした。

「私は、雪村君が走ってる姿が好きだからっ！」

なんで、このタイミングでそんなことを言ったのかは分からない。でも、なぜか今はこれが彼を繋ぎとめるためのベストな言葉だと感

じた。

「だから、もつともつとあなたの走る姿が見たい。死んじゃ嫌だ」  
雪村君の瞳のぶれが収まった気がした。彼は手を離すと、鉄柵を頼りに立ち上がった。

そして、今度は“彼女”ではなく“私”の名を呼んだ。

「……笠原さん」  
「何？」

雪村君は葵の顔を見て、それから力なく微笑んだ。

「ありがとう。そう言ってくれたのは、君が“三人目”……だよ」

言い終わると同時に彼は意識を失った。膝から崩れ落ちる彼は、屋上から右腕だけをだらりと落とし、身体はそこに残して、その場にはたたりと倒れこんだ。

私は思わず悲鳴をあげ、急いで鉄柵を乗り越えようとした。でも、それよりも早く葵が乗り越え、雪村君を抱え込んだ。ひどく心配そうな顔つきで、涙を流しながら葵は雪村君の名前を呼び続けた。

私はいろんな思いがごちゃ混ぜになって、どうしてもその場にいられなくなり、保健室へと駆けていった。

雪村君の身体は警報を鳴らしていたらしい。数日間に渡る睡眠不足に加えて、胃の中はほとんど空っぽという状態だった。

一人暮らしで良かったのか悪かったのか……。

家族に心配をかけなかった点では良かったと言ってもよいのかも  
しれないけれど、家族がいなかったことがまた悪い要因となって、

彼は倒れた。

普段から、まめに家事をするため綺麗に保たれているという彼の家は、信じられないくらいに燦々たる状態だったらしい。

倒れた雪村君を先生と共に保健室に運び終えた後、私は葵と話をした。

「ありがとう」

葵の第一声はそれだった。子どものように泣きじゃくり、夏美とは違って自分の弱さを私の前にはっきりと示しながら、葵は何度も感謝の言葉を述べた。

「……よしっ」

しばらく泣きつくした後、葵はすつと立ち上がると、私の肩に手を置いた。目は真っ赤だけれど、先ほどまでの弱い葵はもういない。「ここからが勝負よ、なのか」

「ふえ？」

その瞳には強い意志が光っている。その切り替えの早さに（……ああ、この人は本当に凄い人だな）と思った。

「体育大会よ。一気に畳み掛けましょう」

「え？ だ、大丈夫なの？ こんなことがあつた後に……」

「大丈夫よ。あなたの言葉で修一もいくらか救われたはず。余計なことを考えさせる前に、さっさと事を進めなきゃ」

「で、でも……」

「でもじゃないわ」

葵は私の頭を軽くなで、それからこりと笑った。

「修一は逃げていただけだもの。走ればきつと思いつすわ。いろんな

なことを……」

「でも、つぐみさんのことは……」

「だから大丈夫だって」

葵は拳をぎゅっと握り締めると、それを小さく掲げた。

「つぐみも修一の走っている姿が大好きだったから。それを見せてあげれば良いのよ。あなたが、ね」

ずっと、葵は空を見上げた。どこまでも続く青い空が私たちを見下ろしている。

本当にそれで全てが救われるのかどうかは分からなかった。

でも、私にできることがあるとすれば、もうそれしかなかった。だから、私は小さく頷いた。

雪村君にもう一度、走ってもらうために、私たちは動く。

結局、雪村君は丸二日眠り続け、目を覚ましたときには、これまでの分を取り戻すかのように、とにかくよく食べた。

きっと「彼女」が彼に何かをしてくれたのだと思う。

彼が元気になれるような、そんな何かを……。

だから「彼女」には少し悪い気もしたけれど、ここからは私の番だ。

夢を見た。

笑顔のつぐみは、俺の手をとって言う。

「修一の走ってる姿、格好良いね。大好き」

俺がその言葉をもらって、どれだけ嬉しかったか。

きつと、誰にも想像できないだろう。

「最近、走ってくれないのね」

つぐみは不満そうに口を尖らせて、俺の顔を覗き込んだ。

「ね。走って見せてよ。私は、ずっと、ずーっと見てるんだから」

唇にあたたかいものが触れた。

俺は、いったい何をしていたのだろう……。。

どれだけ無駄な時間を過ごしていたのだろう……。。

ごめん、つぐみ、葵、それから。。



## 六章 空(1)

「体育大会の出場種目を決めたいと思います」

6月も中盤に入り、高校生活最初の行事ともいえる体育大会が迫ってきた。今日はその種目を決めることになっている。

まずは、ここで失敗してはいけない。

後ろから葵の無言のプレッシャーがかかる。これくらいはやって欲しいと頼んだんだけど、

「あら、あなたがやることに意味があるんじゃない」

と言つて、取り合ってくれなかった。うう……。ど、どうしよう、どうしよう。

「このクラス対抗リレーというのは、各クラスから男女代表1人ずつを選び、1組、2組、3組……8組と学年単位で1チームを作つて競い合う、この体育大会一番の見せ場ともいえる競技です。だから、できればこのクラスで一番足の速い人に出てもらいたいのですが、どうでしょうか？」

「でも、足が速いとか、つて分からなくないか？ 陸上部に入っているならともかくさ」

「そうだよな。まだ3ヶ月弱くらいしか一緒にいないし」

「体育の授業で走ってはみたけど、それだけで判断するのもきついやな」

クラス中がざわめく。

クラス対抗リレー。

これが勝負をかける種目だ。私はざわつく教室の中で、言葉を発するタイミングを探していた。

「では、まずは立候補にしましょうか？ 出たい人、いますか？」

静まり返る室内。2、3年生と同じチームになってリレーを行う

というのは、1年生にとっては緊張ものだ。もしもミスをしてしまつて、そのせいで目をつけられでもしたらどうしようもない。

もちろんというかなんと言つか、手を挙げる人は誰もいなかった。「では、推薦でも……」

ここだ。後ろの席から咳払いが聞こえ、私のがたつと大きな音を立てて立ち上がった。クラス中の視線が集まる。雪村君は前を向いたままで、こちらを見ようとしもない。

「何ですか？ 笠原さん」

「え、えつと、クラス対抗リレーなんですけど……」

ちらつと、もう一度雪村君を見る。依然として、我関せず、と言つた風に窓の外を見つめる彼を見て、本当にこんなことをしてもいいのかと迷う。

……が、そんな私の迷いを察したのか、後ろから椅子を蹴られた。女の子がそんな真似をしちゃだめなんじゃないかな、と思いながら、後ろに目をやると、いやに真剣な顔をした葵がいて、私の目を見て小さく頷いた。

「あの、私は……ゆ、ゆ、雪村君が走れば良い………と思うんですけど……」

瞬間、雪村君がこちらを振り返り、私を睨みつけ、ついで、葵に視線をはしらせた。

「えーつと……雪村君、どうですか？」

司会の学級委員、井上君が、雪村君に同意を求める。

「僕は、そういうのは」

「雪村君はっ！」

彼の言葉を遮って、私は大きな声を出した。クラス中の視線が集まる。雪村君は、私が大声を出したことに驚いたのか、目を丸くして、私を見つめていた。

「中学生のときに、100mで全国優勝していますから、彼しかないと思います」

私の言葉に再びざわつき始める教室。

「え？ 全国優勝って？」

「雪村って、やっぱりあの雪村なのか」

「それで林先生や桜井君が雪村君につきまとってたのね」

「だったら、雪村でいいだろ。決まりだな」

「し、静かにしてください！」

收拾のつかなくなったクラスを落ち着かせるように、井上君が声を張り上げ、再び雪村君に問いかける。

「えっと、雪村君。出てくれるかな？」

雪村君は諦めたようにため息をついた。それから、すっと立ち上がると、こちらに視線を向けた。

「笠原さんが出るなら出ても良いかな」

「……………へ？」

私は突然のことにぽかんとした。私の足は自慢じゃないけれど、とても遅い。

「え、わ、私は」

「いいわ。うちのクラスの女子代表はなのかがやる。それで出てくれるのね？」

丁重にお断りをしようとしたところで、葵が立ち上がって私の肩に手を置いた。

「でも、言っておくけど、この子の足はかなり遅いわよ。大丈夫なの？ 3組の1年生のクラス代表として出るのよ？」

「ささやかな抵抗だ」

雪村君は小さく笑ってから席についた。井上君が困った風に私の顔を見てくるので、もう頷くしかなかった。

こうして、私と雪村君はクラス対抗リレーの代表になった。

「ささやかな抵抗だなんて、変わらないわね、あいつ」  
放課後、葵がはき捨てるようにそう言うのを聞いて、私は首をか  
しげた。

「どういうこと？」

「“推薦”なんていう形で走るのが嫌なんですよ。自分の意思でも  
う一度走り始めるつもりだったんじゃないかしら？」

「……え？ そんなー……。だって葵がそうしろって言ったん  
だよ？」

私のがっくりと肩を落とした。

「今ので嫌われちゃってたらどうしょー」

「あんな態度をとったってことは大丈夫よ。それよりもここからが  
勝負よ」

「え？」

泣き出したくなるのを堪えて、私は間の抜けた声を上げた。ここ

からが勝負って？

「修一は今、屋上にいるわ。だから、なのは今すぐ屋上に向かいなさい」

屋上と聞いて、少しびっくりとした。でも、最近の雪村君はあの頃に比べて、随分と元気になっている。もう自殺なんて考えていないはずだ。

「そこで“あの話”をするの？」

「そう」

あの話……。葵が提案した、あの計画を実行するのだ。

「で、でも、私、き、嫌われちゃってるなら、話聞いてくれるかな？」

「だから、大丈夫だって。あいつは、なのかのこと嫌ってないと思っわ」

「どうして？」

「修一は、本当に嫌いな人に干渉したりしないわ。それに……」

「え？」

葵が言葉を濁したので、私は思わず聞き返したが、彼女は何でもない、といった風に首を横に振った。

「ま、ここはあたしの言葉を信じて、屋上に行ってください。多分、なのかの話ならちゃんと聞いてくれるわよ」

「そ、そうかな」

いまいち自信はなかったけど、葵が言うのなら、そうなのか、と思えるから不思議だ。

……あ、これが「親友」というものなのかもしれない。

「……」「めんね」

不意に声のトーンを落として、葵が謝った。いきなりのことに私は驚きを隠せなかった。

「ど、どうしたの？」

「本当はあたしが頑張らなくちゃいけないのに、全部なのに頼んじゃって……。あたしは……。あたしは、修一の“親友”だったはずなのに」

葵の手のひらに滴が落ちた。葵は泣いているのだ。普段は、凛として格好良い葵にも弱い部分がある。今、私の目の前にいる彼女の姿が、その思いが本心だと分かるから、私は嬉しかった。

「いいの。葵がくれたチャンスが無駄にしたいくないし、これは私のためでもあるんだから」

私は立ち上がると、ぐっと拳に力をこめた。そうこれは私のためでもある。私はなんとしても雪村君と仲良くなりたい。そのためには、自分から動かなくちゃいけない。

その勇気と機会をくれたのは葵だ。謝られる理由なんてない。それに、私の前で二度も弱さを見せてくれた「親友」の信頼に応えなかった。

「任せて」

「……うん、お願い」

私は駆けていく。雪村君がいる屋上へ。

あたしはなんて情けないのかしら。

自分にできないからといって、全てをなのに任せてしまった。

でも、あたしでは無理。

あたしでは修一を救えない。

あたしは9年も一緒にいたというのに、まだ2ヶ月ちょっとしか修一と過ごしていないのなのに、その役目をとられることは少し癪だったけど、こればかりは仕方がない。

年月の長さではない。

あたしは、いつまでたっても「親友」より上にはいけないけど、なのかはいつか「彼女」になれるだろう。

この件が無事に解決したとき、それが証明されるはず。

そしてまた、あの日のように“三人”で笑い合える日がやってくればよい。

……お願い、なのか。

## 六章 空(2)

……雪村君は鉄柵の向こう側に立っていた。

「ゆ、ゆゆゆ雪村君！」

あのと時の状況が思い起こされる。彼がそのまま飛び降りてしま  
うんじゃないかと思つて、私は慌てて駆け寄つた。  
そんな私とは対照的に彼はゆっくりと振り返る。

「どうしたの？ 笠原さん」

その顔は、死のうとしている人のそれではなかった。むしろ、生  
きている人の顔だ。

「あ、え、うー、えっと……」

「もう飛び降りたりはしないよ」

雪村君は笑いながら鉄柵を乗り越え、こちら側に飛び降りた。目  
の前に雪村君の身体がせまり、私は跳んで後ろに下がった。

「この前はごめんね」

「……え……。ん、ん。いいよ」

雪村君は小さく頭を下げてから私に向き直った。

「それで、何か用？」

「え……？ あ、あのね」

「葵に、何か言われたの？」

雪村君は私がびくつと震えたのに気づいただろうか……。仮に気  
づいていたとしても、全くそんな素振りを見せることなく、その場



にしゃがみこんで鉄柵にもたれかかると、静かに空を見上げた。

「死んだ人は、天に昇るっていうよね」

「え？ う、うん」

「空を見上げると、つぐみの顔が見える気がして、つぐみの声が聞こえる気がして……さ。いつの間にか、空を見ることが癖になっちゃったんだよね」

「……え？」

突然のことに、私は目を丸くした。まさか、ここでつぐみさんの名前が出るとは思っても見なかった。啞然とする私に視線を戻して、雪村君は小さく笑った。

「聞いたんでしょ？」

「う、うん……」

「笠原さんは、つぐみに似てるんだ」

あのとき、私のことを「つぐみ」と呼んだことに関係しているのだろうか。でも、似てる、とはいったいどういうことだろう。私の記憶が確かならば、つぐみさんは私とは全然違うはずなんだけど。背が小さいことと、私が必死に伸ばしたこの髪くらいしか似ているところはない、と思う。

「ど、どこが？」

「葵に振り回されているところとか、俺なんかのために必死になつてくれるところとか……」

雪村君は顔を俯かせた。もしかしたら、彼女を思い出して泣いているのかもしれない、と思った。

「いつも一生懸命なところとか」

でも、そう言つて顔を上げた彼の瞳には涙らしきものは見えなかった。

「……私は、別に一生懸命なんかじゃないよ」

「そうかな？ 本当に一生懸命やっている人は一生懸命やってるとは言わないしね。少なくとも俺には君は全力で戦っているように見えるよ」

「そんなことない！ わ、私は全然頑張れてなくて、だ、だから、中学生のとき、雪村君が本気で頑張ってるのを見て羨ましくて、それで」

「あの友だちとは、仲良くやってるの？」

「え？」

突然のそのセリフはいったいどういう意味なのだろう。雪村君は、あの日のことを覚えてくれていたのだろうか。

「中学二年の県大会。あのときの子でしょ？ 笠原さんって」

「……そ、そう」

「久しぶりだね」

「うん……」

「ごめん。最初から気づいてたんだ」

「え？」

「でも、近づく勇気がなかった」

雪村君は、頼りなさげに微笑むと、また下を向いた。

「逃げていたんだろ？ きっと」

「……………」  
「笠原さんと葵が仲良くしているのを見ると、昔に戻ったみたいで息苦しかった。もう二度と戻ってこないはずの日常を見ているみたいで辛かった」

声が震えている。私は何も言えずに、ただただ彼を見下ろすしかなかった。

「でも、笠原さんは笠原さんで、つぐみはつぐみだ。君とつぐみを重ねるのはもう止めにしようと思う」

再び顔を上げた彼の顔には決意の光が宿っていた。

「それを吹っ切らせてくれるために、君はここに来たんじゃないの？ 葵に乗せられて」

「え、えーっと……………」

「そういうところは全く似てないんだよな。笠原さんも葵をうまく手玉にとってみなよ。からかいがあるよ、あいつは」

そう言っつて、くくつと笑う雪村君は、中学生のときに見た、私が好きになったときの彼の顔に徐々に戻っているようだった。

表面的ではなく、心からの笑顔。

私がつもつ一度それを見ることが出来る日は、もうすぐにやってくる気がした。

「それで、要件は何？ 言ってみな」

「あ、あの、わ、私と賭けをしませんか？」

「賭け？」

「は、はい。えっと、今度のクラス対抗リレーで、3組が1位になれたら雪村君の勝ち、それ以外なら私の勝ちです」

「それって、俺が不利じゃない。クラスは全部で8つあるんだよ？」

「ここだ。ここで、葵に教えてもらった、とっておきの一言を雪村君にぶつけてやる。」

「か、勝つ自信がないんですか？」

それを聞いて、彼は一瞬きよとした顔になり、それから不機嫌な顔になった。

「それも葵の入れ知恵か？ 全く油断ならないやつだな……」

そうぼやく彼は立ち上がってお尻をはたくと、私の顔を上から見下ろしながら言葉を続けた。

「で、君が勝つた場合、俺はどうなるの？」

「私が勝つたら、雪村君は陸上部に入ってください！」

「……………へ？ そんなことで良いの？」

「そ、そんなことじゃありません！」

間の抜けた顔をする雪村君に、私はくっつかかった。そんなことじゃない。私にとっては、とても、とても大事なことなのだ。

「……………そっか」

雪村君は、何かを考えるように目を瞑り、そのまま口を開いた。

「分かった。良いよ」

「ほ、本当に！？」

「ただし、俺が勝つたら、今後一切、俺のやることに口を出さないって約束できる？」

「……………う、こ、今後一切？」

「そう、今後一切」

雪村君は目を開けると挑戦的な瞳を向けた。もし、これでもう二度と陸上はやらない、と言われたら私に手出しはできなくなる。

……でも、ここは退けない。

「わ、分かった」

「おし、交渉成立だな。んじゃ、笠原さん、ちょっと走ってみて」  
「……………え？」

雪村君は、私の手を引くと屋上のはしっこに連れて行く。私は彼に引つ張られるままに、そこに立った。

「え？　なんで、走るの？」

「だって、確か笠原さんって走るの苦手でしょ？　教えてあげる」

「え、いや、でも……………」

「勝ちたくないの？」

「か、勝ちたいけど、か、勝ちたくない、というか……………」

勝ちたいけど、勝ちちゃうと賭けには負けてしまうわけで……………。

その狭間で揺れる私は、答えを濁すしかなかった。

「俺を走るように仕向けたのは君だよ」

「む。ま、まあそうだけど……………」

「だから、一緒に走ろう、笠原さん」

「う……………わ、分かった」

なんだか上手く乗せられた気もするけれど、私は内心嬉しかった。まさか、雪村君とこんなに長い時間一緒にいられる日がくるとは思わなかった。

足はがくがくになったけれど、それでも、すごく楽しかった。走るって、こんなに楽しかったんだ。

「さて、あとは本番を待つだけみたいね」

二人の様子をこっそりうかがっていたあたしは、なのが走り始めたころに、そっと屋上を後にした。

なのかの力なのか、それともつぐみの力なのか、修一はゆっくりと元に戻りつつある。まだまだ純真なのはどうか分からないけれど、修一はきつとうまく“乗せられてくれる”だろう。

さて、最後の仕上げね。

後は、桜井侑哉にうまいことやってもらって、とどめを刺すところ。  
よし。

## 七章 クラス対抗リレー(1)

「俺がアンカーで良いんですか？」

「アンカーは君しかないよ。だって、4組のアンカーはあの桜井なんだから？ 君じゃないと勝てないって」

「でも、1年生がアンカーって、ちょっと……」

「いいからいいから。俺たちは勝ちに来てるんだから。頼むよ」

「……はい、分かりました」

クラス対抗リレーでアンカーになった雪村君はアンカー用のたすきを先輩たちにかけられ、少々困惑気味みただった。

そんな彼の元へ、桜井君が笑いながら駆け寄ってくる。

「よお修一。聞いたぜ？ 負けたら陸上部に入るんだって？」

「……誰から聞いたんだよ。怒らないから言ってみな」

ちらつと雪村君が私を見る。違う。断言する。私じゃない。私じゃないから！

「そんなことはどうでも良いじゃねーか。……で、本当なのか？」

「本当だ。うちのクラスが1位になれなかったら、俺は陸上部に入るという約束だ」

「俺があれだけ言っても全く動かなかつたお前が、そう言うってことは、なんかあつたんだな？」

「……あつたと言えば、あつたな」

今度は桜井君が、ちらつと私を見てきて、私はそつと後ろに下がった。

「ふん。ま、いいや。よしっ！ 燃えてきたぜ。お前、アンカーだろ。俺もアンカーだから、絶対勝つてやる」

「言ってる」

「じゃあ、また“競技場”でな」

桜井君は陽気に笑いながら去っていく。雪村君が私に視線を向けたので、私は首をぶんぶん振って否定した。言ったのは私じゃない

い。多分……ん、絶対、葵だ。

雪村君も同じ意見らしく、苦笑を浮かべて口を開いた。

「どうせ葵だろ」

「そうだと……思っ」

「ま、なんでも良いや。だって笠原さんは俺を勝たせてくれるんでしょ？」

「ふえ？」

「ふえ、じゃなくて……。俺が帰ってからも、放課後こっそり練習してるって葵が言ってたよ」

葵っ  
！

私は心の中でそう叫ぶと、テントで応援する彼女をにらみつけた。葵も私に気づいたらしく、小さく舌を出して、悪びれた様子もなく笑っている。

確かに私は自分で自分を褒めたいくらいに練習したと思う。でも、それが彼に知られていることは、なんだかとても恥ずかしくて、とてもくすぐったかった。

「頑張ろう、な」

そう言った雪村君の顔からは、賭けとか約束とかそんなもの関係なく、とにかくこの勝負に勝ちたい、という思いがうかがえた。

「うん。頑張ろうね」

第一走者の私はかなり緊張していた。8人も一斉に走るのだ。密



集地帯でこけてしまわないか、そしてダントツのビリにならないか……もう不安でいっぱいだった。

うちのグラウンドは1周約180m。女子、男子、女子、男子、女子、男子の順番で1チームを作り、女子は半周、男子は一周、アンカーは1周半も走る。こうなると勝負はアンカーと言っても良いかもしれない。普通の人なら260mの全力疾走なんて無理だ。アンカーが走り方を考えないと勝てる見込みはないと思う。でも、うちのアンカーは雪村君だ。

負けるはずがない。

……勝ったら賭けには負けるんだけど。

スタートラインに立つと、心地よい緊張感が私を支配した。多分、比べ物にならないと思うけど、雪村君もレース前はこんな気持ちになるのだろうか。ちらっと彼の方を見ると、彼もこっちを見ていた。ドキッとして慌てて前を向く。落ち着け、私。もうすぐ始まるんだ。

「位置について」

陸上部の部員さんがスタートの合図をする。8人が横に並び、隣の人の鼓動が聞こえてくるくらい辺りは静かになった。

「よーい」

ピストルの音がして全員が一斉に走り出した。雪村君に教えてもらったように走る。

私は足が遅い。

そんなことは分かってる。でも、この時のために必死に練習して

きた。

今は全力で走るだけだ。

私は8人中7位でバトンを渡した。

これが私の本気だった。申し訳ない気持ちで雪村君の方を見ると、彼は空を見上げていた。

……違った。

顔を上に向けて目を閉じていた。今、つぐみさんの応援を聞いているのかもしれない。

そう思うと、ちよっぴり妬けた。

第三走者にバトンが渡り、うちのクラスは5位にあがっていた。トップは4組。桜井君のクラスだ。私も必死に声を出して応援をする。

「が、頑張れっ！」

勝ちたかった。負けたくなかった。……賭けなんてどうでもいい。

私はとにかく雪村君と一緒に勝ちたかった。

第四走者、第五走者と徐々に順位を上げていき、雪村君にバトンが渡るころにはうちのクラスは2位に上がっていた。

「ゆ、雪村くん！」

バトンを待っている雪村君は私の声に気づいたのか、こつちを見て小さく手を振ってくれた。

「任せとけ」

歓声で声は聞こえなかったけど、彼は確かにそう言った。

いよいよアンカーにバトンが渡る。

まず、桜井君が1位でバトンを受け取り、それから、ちょっと遅れて雪村君にバトンが渡った。

「しゅーいちー！」

はっとして私は声が出た方に顔を向けた。そこにいたのは葵だった。一瞬、つぐみさんの声かと思って驚いた私は、そんなことないよね、と首を振ってレースの方に意識を戻す。

桜井君と雪村君の差はゆっくりと、でも確実に縮まっていた。半周が終わるころには身体1個分の差になり、一周が終わるころには横一線になった。

「修一、いつけー！」

二人分の音量があるのではないかと思われる葵の大声が私の耳にも届いた。最後のカーブに差し掛かって、残り数十メートル。雪村君の身体が桜井君を越える。そのまま一気にいけるかと思ったのも束の間、桜井君が負けじとくらいつき、再び横一線に戻る。カーブを終え、最後の直線に入った。



## 七章 クラス対抗リレー（2）

ゴールテープを先に切ったのは、雪村君だった。

最後の直線で、信じられない加速を見せて桜井君を振り切り、ゴールに文字通り飛び込んだ。

力を全て出し切ったのか、起き上がれずに倒れこんだまま右腕で大きなガッツポーズを作った雪村君は、すぐさま興奮した先輩たちに囲まれ胴上げをされていた。

「おめでとっ」

また、声が聞こえた。今度はテントではなく上の方から聞こえた気がして、私は空を見上げた。太陽がまぶしくて、私は思わず目をこむる。

きつと、つぐみさんもこのレースを見ていたのだろう……。

私も彼に祝福の言葉をかけるために駆け寄っていった。

胸上げから下ろされた雪村君は、私の姿を見つけると息を整えながら近づいてきて、笑顔でブイサインを作った。

「おめでとー」

「当然だ。笠は……………なのか」

その顔は、今度こそ中学生のときに見た、あの笑顔だった。つぐみさんに向けられていた、あの笑顔を今、彼は私に向けてくれている。

それが嬉しくて、こそばゆくて、私も笑顔を浮かべて彼の胸に飛び込んだのだった。

予定通り、勝てた。これで多分、計画通りに事が運ぶと思う。

最後、なかが修一に抱きついたのは想定外で、彼女は意外と大胆な人なんだ、と不覚にもちょっと驚いてしまった。

「ごめんね……」

余韻の冷めないリレーの後、あたしは修一にそう言った。今しかないタイミングで言えたと思う。

「そこは、おめでとう、だろ？」

一瞬きよとんとした修一は、にやっと笑ってあたしの頭を軽く叩いた。

懐かしい映像を見ているようだった。彼のぬくもりを感じて、あたしは泣きそうになるのを堪えて、笑顔を浮かべた。

もう一度、彼とこんな風に笑える日が来たのだ。

「おめでとう、修一」

「ありがとう、葵」

あたしたちは、新しい一步を踏み出す。



過去を抱いたまま、あたしたちは未来へ進む。

あたしたちは生きているのだ。

つぐみのためにも、あたしたちは前へ進む。

修一は、忘れていた笑顔を思い出したかのように、たくさん笑った。

その横に、恥ずかしそうに笑うなのかがいる。

あたしは今、ようやく修一の「親友」に戻れた。

## エピソード ヒロインの資格

体育大会が終わって数日後、お昼休みに雪村君に屋上に呼び出された。そこで、私はあるものを手にし、ドキドキしながら屋上に向かった。

「陸上部に入ることにしたから」

第一声でいきなりそう言われたとき、私はかなり驚いた。

「え？ え？ ど、どうして？」

「口出ししない約束だろ？」

そう言いながら笑った雪村君は、まだ少し寂しそうだったけど、きつと変わったのだらうと思った。

「2年前にも言ったと思うけど、俺は陸上が好きだからね」

「あ……。そうだったね」

雪村君の口からもう一度その言葉を聞くことができ、私はとても嬉しかった。

「うん」

はにかむ雪村君を見て、ちょっとした幸福気分を味わうのも束の間、私はひとつ気になることが頭に浮かび、それを問いかけた。

「あれ？ でもバイトはどうするの？」

確か、彼はほとんど毎日のようにバイトをして、生活費に充てていたはずだ。

その問いに雪村君は大きいため息をついて、ひどく情けない顔になった。

「親に頼み込んで、仕送りをしてもらうことにしたんだ。本当は俺の我儘で家を出たわけだから、生活費は自分の力で稼いで生計を立てなくちゃいけないんだらうけど、結局、両親には迷惑をかける形になっちゃったよ。まっ、こうなったらインターハイにでも出なく

ちや格好がつかないな。……はあ。バカ息子は親孝行を真剣に考える年頃になりましたよ」

肩を落とす雪村君にどんな言葉をかけようか迷っていると、彼は表情を一変させて大きく伸びをした。それから頭をかきながらそばを向く。

「なんだか少し照れているみたいだ。」

「ん〜……そんなことはどうでもよくて、さ。あの、葵のことなんだけど……。あいつはバカで尊大で高慢で腹が立って仕方がないやつだけど……。け、結構良い奴だから、よろしく頼むよ」

私は、急にそんなことを言われて呆気にとられたけれど、でも、雪村君のその言葉の中に、彼が葵を本当に大事に思っていることがうかがわれて、笑みがこぼれるのを我慢することができなかった。

「うん、任せて。だって葵は、私の“親友”だから」

「……そっか」

それと同時に、正直、少し妬んでしまった。

私は、今、雪村君の何なのだろうか？

「あ、あの、えーっと……」

「どうしたの？」

そして今日もまた、私は葵の計略に乗せられ、勇気を振りしぼらなくてはいけない展開に追い込まれている。

準備してきた例のもの出番だ。

「お、お弁当を、つ、作ってきたんだ、けど……?」

「俺に?」

「う、うん」

私は顔を真っ赤にして、背中に隠したお弁当を手渡す。葵は絶対に受け取ってくれると言っていた。それを信じて私はそれを突き出した。

「ありがとう。でも、俺も作ってきてるんだよな」

彼はそう言って頬をかいた。それから（それなら受け取ってもらえないよね）と思って、しゅんとした私の手からお弁当を受け取ると、小さく笑った。

「じゃあ、俺のも取ってくるから、それ食べる?」

「……え? よ、喜んで!」

「そんな大したもんじゃないけどな。じゃ、ちよつと待ってて」  
小走りで駆けていく雪村君の背中を見送ってから、私は空を見上げた。

散りばめられた白い雲が、青い空を彩っている。  
気持ちの良い風が吹いて、声が聞こえた。

「ありがとう」



方だった。その中でまず卵焼きをとり、口に運ぶ。ふわりとした食感で、卵の甘みが口の中に広がっていく。

圧倒的に私の作ったものよりも美味しいことに悔しさを隠し切れなかった。

「これ、私より美味しい……」

「一人暮らしなめんな」

「修一は、主夫になれば良いよ。そうしたら、あたしが働いてがん稼いであげるから」

「それは助かります。お願いします」

私はまだ雪村君の「友人A」にすぎないのかもしれない。

じゃれあつ葵と雪村君を見ながら、嫉妬することもしょっちゅうある。

それでも……。

「しゅ、修一君、お、美味しいかな？」

私の作ったお弁当に箸を運ぶ雪村君に向かって、顔を真っ赤にしながら訊ねてみる。

「え？ あ、ああ美味しいよ、なのか」

若干、動揺しながら答えてくれる雪村君は、ちょっと可愛かった。

そんな気持ちを遮るように「ほんっつとつに、可愛いわね、全く」と言っ、私に抱きついてきた葵にどきまぎしながら、少しだけ頬を朱に染めた雪村君を盗み見る。

私はきつと、雪村君の「ヒロイン」に少し近づけたのだと思う。

おわり。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9687e/>

---

ヒロインの資格

2010年10月11日13時27分発行